
逆ハーツ子 が あらわれた！（仮）

片岡

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

逆ハーツ子 が あらわれた！（仮）

【Zコード】

Z9530X

【作者名】

片岡

【あらすじ】

ある日やつてきた逆ハーツ子に関わることなく（多分）、我が道を往く調理部男子とパソコン部女子の阿呆なお話。
私と友人のリレー小説です。
目指せ一日一話更新。

1 講義部室

「わあっ、ありがと'つー。」

「お話を、

「本当? わたしもみんなの」と、だっこすきー。」

ある日、学園に突然転校してきた可愛らしい女の子が繰り広げる物語……

「部長! 部長おおおおおー!」

「な、なんだー? どうしたー?」

などではなく、

「電子レンジにいた卵が爆発しましたー。」

「馬鹿野郎! お前、あれほど電子レンジで茹で卵は作るなど……」

「…」

「おこ後ろに隠した無残な卵が先生には見えたぞ 広崎」

「違います先生！　これは俺の愛に耐えきれなかつた卵が爆発して……」

「意味のわからない見え見えの嘘を吐くなああああああああ……！」

その女の子の脇で繰り広げられる、

「先生！　どうぞ俺の愛を受け取つて下せ……」

「先生はそんな壊れた愛は要らない」

阿呆な物語で御座います。

1 調理部男子（後書き）

あまりの短さに絶望した！

2 パソコン部女子

力タカタカタ

パソコンを早打ちして、ふと手を止め次をどうしようか考える。特に何をやるとも決めてなかつたので、ずっと先の文化祭のポスターを創ることにした。
まあイラストは適当に誰かに頼もう。

「坂田先輩、ちょっと……」

思わず溜息。

また新入生がやらかしたようだ。
入部するとき下手とは言つていたがここまでとは…、ちなみに本日六回目だ。

まあ募集のとき『どんな人も大歓迎』とやつたからこつちも文句は言えないし、私は副部長だから教えない訳にもいかない。

「今度はどうよ。え、ここはさつき……」

部長が最近休みがち、というか大抵休んでる気がする。なんで部長になつたんだと言いたいが他に人がいないから仕方ない。

「あー、また間違てる。だからここはこれを使えば……！」

部員数、私入れて8人・

今日も新入生相手に奮闘中です。

人物紹介（前書き）

結構適当な紹介です。 隨時更新。

人物紹介

名前・広崎 大和

容姿・黒髪茶目。イケメンで良いよ。爽やか

性格・阿呆の子。

備考・思い切り運動部で青春してそうなのに調理部

名前・坂田 美穂

容姿・一言で言えば可愛い。黒髪のツインテールで目は焦げ茶。

性格・真面目で勉強熱心。運動は全く出来ない。不器用

備考・料理が苦手。パソコン部に入っている。風紀委員らしい

名前・にかい一階堂

容姿・それなりにイケメソ

備考・調理部顧問。愛煙家

名前・椿 小百合

容姿・栗色の胸までのカールした髪に、琥珀色の零れ落ちそうなほどに大きい瞳。“絶世の”がついても可笑しくないくらいは美少女。

性格・ちょっと歪んでる。

備考・イケメン大好きなのを包み隠そつともしない残念な子になってしまった。可笑しいな。当初はもうちょっと賢い子にしようと思つてたはずなのに。全ては私の友人のせいです

名前・園下

容姿・不明

性格・陽気……?

備考・美穂の担任兼部活の顧問

名前・宮城

みやぎ

容姿・フツメン

性格・阿呆

備考・大和のクラスメイトで友人。大和の後ろの席

名前・本多

ほんだ

高志

たかし

容姿・イケメン

性格・阿呆

備考・美穂のクラスメイト。野球部キャプテン。

大和をどうしても野球部に入れたいけどぶつちやけ一年生からじや
遅いと思う

名前・**夏輝**なつき

容姿・普通に美人。ショートカットで伊達眼鏡。

性格・阿呆

備考・パソコン部部長で生徒会長とは親友。少しレズつ氣がある。

名前・**菖蒲**あやめ

容姿・かなりの美人。髪は肩までの長さ。

性格・控えめ。大人しい子

備考・生徒会長。小百合が来るまでは男子の中で一番人気だったが、夏輝が傍にいるから彼氏は一度も出来たことがない。レズつ氣有。

名前・**青山**あおやま

容姿・ちょいイケメン。髪の毛ピンとかで止めてそうなイメージ。
何故か

性格・阿呆。レンジでゆで卵を作るのが大好き

備考・名前出すつもりはなかつたんだけど、無いと何かと不便だと
気付いて急遽名前有キャラに。松島と仲が良いが、其処に恋愛感情
が含まれているのかは不明

名前・まつしま松島

容姿・ちょい美少女。髪の毛はポニー・テールなイメージ。何故か

性格・青山と同じ

備考・青山と同じ

名前・奥おく惠斗けいと

容姿・イケメン

性格・腹黒かつたら良いね

備考・生徒会副会長。しかし、今は仕事をさぼっている。越戸と二人セツトで生徒会の夫婦

名前・越戸 義樹

容姿・イケメン

性格・俺様に出来たら良いのにね。出でくるかわからないけど。出てきた

備考・生徒会会計。しかし、今は仕事をさぼっている。奥と二人セツトで生徒会の夫婦。俺様にしようとして一人称が俺様になってしまったあいたたくな子

名前・釜元

容姿・顔が残念過ぎる上に背が低い

性格・すつじい真面目

備考・真面目なのに顔が残念だから女子に避けられている。誰もい

……もうちょっと良いキャラにしてあげれば良いの
でないことじゅうで泣いてるとか泣いてないとか

名前・音波おとは

容姿・何処にでも居そうな普通の人

性格・朗らか。中国の歴史のことになるとなんか燃えはじめる

備考・理科担当の先生。中国の歴史が大好きで語りはじめるところ止ま
らなくなる。何故理科をやめてしまったのかは不明

人物紹介（後書き）

私が新たに出すキャラは何故か阿呆が多い。

3 調理部男子（前書き）

何故か今回に限つて新しい書き方に挑戦してみよがなんて思つてしまつたので三人称視点になります。言葉は合つていますか？というわけなので、私の書く視点は広崎を中心として見た視点（？）だと思つて下さい。

説明下手だな。

3 調理部男子

「えー、今日は柏餅を作りたいと思います！」
かしわもち

キツと無駄に凜々しい表情を作りながら、大和は部員たちに柏餅のレシピの「コピー」を配った。簡単な説明をしようと口を開いた大和だったが、それを部員たちの不満の声が遮つた。

「なんでそんな渋いもんばつか作りたがるんスか部長は」「えーっ！ もっと美味しいもの作りましょーよーっ！ ガトーショコラとかー、シフォンケーキとかー！」

今時の若者らしい部員たちに柏餅はお気に召せなかつたらしい。大和は残念そうに眉を下げ、じゃあ、と口を開く。

「今日はみたらし団子を作りつか」「変わらない！」「おーっす、やつてるかー？」

部員たちがまたも大和に抗議しようと口を開いた瞬間、調理室（兼部室）のスライド式のドアがガラリと開いた。部室中の人間の

注目を集めながら入ってきたのは調理部顧問である、一階堂だつた。
にかいどう

先程まで教師専用の喫煙スペースで煙草でも吸っていたのだろう。

か。少々臭う。大和は眉を顰めた。

一階堂という男は、何故教職に就いているのか理解出来ないほどには容顔の整つた男である。

大和は常々思う。この男ほど調理部顧問といつ肩書きが似合わぬ男はないだろう、と。しかし、大和は自分のことは言えないということに気がついていない。

一階堂はコツコツと靴を鳴らしながら大和に近付き、手元のレシピを覗き込むと器用に片眉を上げ、顔を顰めた。

「今日は何作るんだ？……んん？……また和菓子か？好きだな、お前も」

「美味しいでしょ」「美味いけどな」

「でもよお……、と一階堂が言つ。

「美味しいからつて理由で好きなもんばっか作るのは違うだろ？況してやお前の独断で選んだもんばかり」

「……そうか。でも……、うーん……。うーん」

「でも、あいつらだつて好きそうな味だ。でも、うーん、どうしよう。額に手をあて、暫し考え込んでいた大和だったが、ようやつと納得がいったのか小さく呟いた。

一階堂は小さく笑つた。悪い奴ではない、と。素直な良い奴だか

ら憎めない。色々と得な奴である。

また大和が口を開く。

「じゃあ、今日はアプフルシュトウルーテルを作ろうつか」

「やつた！ あふ……、ええ！？」

「なにこの衝撃。普段縁側に座つてぼやぼやしてお爺ちゃんがいきなり流暢に流行語を使って喋り出したようなこの衝撃」

「もう先生お前がわかんない」

いきなりあまりメジャーではなさそつた洋菓子の名前を出した大和に、待ち望んでいた洋菓子のやつとの登場に喜んでいた部員たちも困惑顔だ。一階堂は微妙な顔をしている。案が極端すぎるのが大和の特徴である。

「シュトゥルーテルは生地の下に新聞を置いて読めるくらい薄くしたもので、それで林檎を煮たものを巻くんだ。美味しいぞ」

「へー、よく想像出来ないけど美味そうッスね」

「ロールキャベツの林檎バージョンみたいな感じですかー？」

問い。そして僅かな沈黙。

「まあ、だいたいそんなものだと思つてれば良ことと思つ

「適当だな、おい」

「腹に入ればなんだつて同じだ！」

「それで良いのか調理部部長」

一階堂の突つ込みを気に留めることなく、大和は言った。

「じゃあ、俺はパソコン室でコピーをとつてくれるから、少し待つてくれ」

「はーい」

部員たちの軽い見送りの声を受け、大和はパソコン室へと向かつた。

大和はパソコン室の扉をなんの躊躇いもなく開け放つた。中に誰かいるかもしない。そんなことは一切考えないのが大和の特徴である。パソコン室にいた後輩と思しき生徒は驚きに情けない悲鳴を上げていた。

その声に大和は僅かに目を大きくした。小さくすまないと詫びの言葉をかけてから、パソコン部部長である美穂に声をかけた。

「美穂、パソコンとコピー機を借りるだ」

一心にパソコンに向かい休むことなく手を動かしていた美穂は、大和の声にその手を止め、顔を上げた。

「大和。……すぐに済む?」

「済む」

「じゃあ、私の使っていいよ」

「ありがとう!」

機嫌が好さそうににっこりと笑った大和は早速マウスに触れ、レシピの検索を始めた。

「あふ……、なにこれ?」

「ア�플 シュトルーデル。上手く出来たらお前にも持つてやろうか?」

「うん」

「わかった」

頑張って作るから、楽しみにしてろよ、と大和は続けた。美穂のすぐ傍で作業をしていた後輩はその様を意外そうに見ていた。手早くコピーのための動作を済ませ、コピー機の前に移動する。少しの間を置いて、コピー機は音を立ててレシピを吐き出した。やつと人数分の「コピーが出来上がり、大和はそれを持ってパソコン室から出た。

今度は後輩を驚かせないよう、そっとドアを閉めていると、後輩の小さな声。

「……先輩つて、彼氏いたんですね」

「……、は？」

美穂の感情の読み取れない声。大和は閉めかけていたドアを開けて言った。

「違うぞ？」

「ひやああああつーー？」

後輩はまさか大和がまだいるとは思わなかつたのか大きな悲鳴を上げた。美穂も驚いた顔でこちらを見ている。

その余りのリアクションの大きさに逆に大和が驚かされながら、今度こそパソコン室を後にした。

それに対して、と大和は思う。

「あの後輩は、俺たちの何処を見て恋人だなんて思つたんだらう…

…？」

しかし、そんな大和の些細な疑問は、眼前のレシピによつてすぐには埋め尽くされてしまつたのであつた。

3 調理部男子（後書き）

一話との差はなんだらうか。

4 パソコン部女子

帰りのホームルームの挨拶では大抵の奴は、寝る、早く終われといライラする、の一種に絞られる。

私は勉強するという別の種に入るのだが。

まあ、ろくに自分の話を聞いていないことを担任は知らない。

まあ、この可哀想な私たちの担任の名前だ。名前は呼ばないから忘れた。

「以上！ 気をつけて帰るよ！」

みんながビクリと身体を震わせる。声が馬鹿でかいから仕方ない。それはともかく、先生が去ると一人の女子の元に人が集まる。

「小百合ちゃん、今日は俺と帰ろうよ！」

「馬鹿が、お前は。小百合ちゃんは俺と帰るんだよ！」

「や、小百合ちゃんは僕と帰るんだよね……？」

「わたし、みんなと帰りたいなあ」

「……小百合ちゃん」「

語尾にハートが付きそうなほどだらしない声が聞こえる。
それもこれもある口突然転校して来たこの女が原因だ。

椿 小百合、それがこの元凶の名前だ。

噂では彼女が来るまでの元気N.O.・I.だつた生徒会長が一日で抜かされたとか。

今では写真部の奴らがストーカーの様に彼女を追い回すといつ。

ちらつと横目で馬鹿な男子を見る。

彼女がイケメンが好きとほざいたおかげで今は男子は校則違反スレスレの恰好だ。

彼女に狙われた可哀想なイケメン男子は様々な手を使って落とされるといつ。もう大体のイケメンは彼女の手駒らしい。

「馬鹿馬鹿しい、脳が腐りそう……」

小声でそぼやく。

小百合ちゃん親衛隊（なんで出来たんだ…）に聞かれれば半殺しにされるだろうか。まあ、返り討ちに出来ないことは無いと思うが。美穂はどうせ今日も来ないのであろう部長の代わりにパソコン室を開けるため、逃げるよう教室を後にした。

.....

今日も文化祭のポスターを創るべく、手早く文字を打ち込む。イラストは上手い奴に描いてもらい、既にバックになつていてる人が寄つて来そうな適当な文面と日にちを打ち込んでいると、壊れそうなほど大きな音を立ててドアが開かれた。

こんなことを堂々と毎回出来る人間は私が知っているかぎり一人しかいないからそう驚くことではない。しかし、新入生は予期せぬ訪問に驚いたのか悲鳴をあげていた。

いつもの事だから早く慣れろ、身が持たないぞ。

「美穂、パソコンとコピー機を借りるぞ」

その声で手を止め見上げればそこにはいるのは大和だった。いつも通りレシピの事だらう。

「大和。……すぐに済む？」

「済む」

「じゃあ、私の使っていいよ」

「ありがとー！」

笑顔が爽やかだ。

そういうえば大和もイケメンの部類に入るのではないだらうか。
変な奴だから噂も広がっているはずだ。よく椿のターゲットにならないものだ。

そこは持ち前の運というか何と言つか。

そんなことを考へてる間にさつさと大和はレシピを調べる。

「あふ……、なにこれ？」

「アッフェルシュトゥルーデル。上手く出来たらお前にも持つてきてやろうか？」

長くてすぐには読めなかつた。それを簡単にサラッという大和。
私はお菓子は好きだが自分で作ることが出来ない。なのでよく和菓子を創る親友、もとい料理部部長に時々貰つてゐるのだ。

だから私がこの話を断る訳もなく。

「うん」

「わかった」

簡単な会話で終わらせる。

いつも誘ってくれるから私の事をよく分かっていると思つ。頑張つて作るから、楽しみにしてるよ、と大和に言われて素直に頷く。

ア�플ョルシユトゥルーテルと言ひ食べ物がなにかは知らないが期待は持てる。

さすがになれて、いるだけありあつといつ間にコピーするための操作を終わらせると、コピー機の前に移動し、枚数が揃うと出て行つた。それ待つていたかのようにお騒がせな新入生が口を開く。

「……先輩つて、彼氏いたんですね」

「……、は？」

待て、どじをどう見たらそうなるんだ。しかもそれじゃあ私に彼氏が出来たことが無いみたいじゃないか、いや、まあ、出来たこと無いけどや。

いろんな意味を込めていつもより低音で返すと怯えた。失礼だな。

「違うぞ？」

「ひゃああああつー？」

新入生の悲鳴が響く。頭痛くなるから毎回大声上げるの止めて。
というかまだ居たんだ、大和。

それだけ言つとまたドアを閉めて行つた。本当にそれだけ言いたかつたのか……。

溜息をついて、固まる新入生を一瞥してからパソコンに戻つた。
まら文化祭のポスター創りを続ける。
新入生はやつとパソコンに戻つたがまた上の空だ。

「…」

やつと完成したポスターを試しに一枚印刷してみる。なかなかよく出来ていると自分でも思つ。今年はこれでも良いと思つべういだ。
早速顧問に見せに行く事にした。

……

「失礼します」

断りを入れてから職員室に入り顧問の元へ向かう。

「おひ、坂田…どうした、何か用か」

「園下先生…。文化祭のポスターが出来たので持つてきました」

顧問は私の担任の園下先生。この人も部長と同じで部活に殆ど出ない。前に何度か来るようになつてみたが変わらないので既に諦めた。

「ん、どれどれ……。さすがは坂田だな！今年はこれで決まりだ！」

本当この人は審査が甘いと思う。数秒しか見てないだろ、あんた。

「はあ、どうも」

「いや、坂田は入ったときから腕が良いよなー何しろ、」

「あ、私失礼します」

そのままポスターを置いて逃げるよつに職員室を出て行った。あの様子じゃ長話になるのは明らかだ。

溜息をついてから最近溜息が多いことに気付く。何といっても私の周りはお騒がせな人間やはちゃめちな人が多すぎる。

せめて何かを食べて疲れをとるつと思い大和が持ってくる今日の料理に期待した。

4 パソコン部女子（後書き）

いつも、片岡さんの友人です。

片岡さんに勧められてしばらく前に小説を書きはじめました。
まだまだド素人なので内容も薄いし、表現も下手ですが、こんな私の小説を見続けてもらえるとド素人としては幸いです。

椿 小百合視点 1（前書き）

今回は片岡が書きました。

ぐだぐだと誰もがわかりきつてこりであります注意を繰り返す男園下を見て、小百合は周りに語られぬよう、小さくため息を吐いた。退屈だ。帰るときに寄り道はしないようにだとか（今時守る奴もない）だらうと思う）、交通事故には氣をつけろだとか、小学生ではないのだからわかつていい。

「以上！氣をつけて帰るよ！」

園下の馬鹿でかい声が鼓膜を震わせ、小百合は不愉快そうに目を細めた。

が、それも一瞬のこと。すぐに小百合は可愛らしい笑顔を身に付けた。途端に席の周りに集まる男たちに、小百合は満足げにこりとした。

小百合ちゃん！小百合ちゃん！今日は俺と…いいや俺と…うつん、僕だよね！？ねえ小百合ちゃん！ねえねえねえ…！

（うああ…幸せ…！）

小百合は自分の心が狂喜の色に染まっていくのを感じた。抑えき

れない笑みが口許まで上ってきて、満面の笑みを披露する。それすら周りの男たちは魅入ってしまつたのだから、楽しくて楽しくて堪らない。

小百合は自分の名前を呼ばれるのが好きだった。呼ばれれば呼ばれるほどに、自分が必要とされているのだと感じることが出来るからだ。

群がる男たちの言葉に適当に愛想笑いを返しながら、小百合は自分に突き刺さる幾多もの視線を感じた。しかし、小百合はそれを意に介することなく、笑ってみせた。

羨ましいのだろうと、妬ましいのだろうと。小百合は敗者共を嘲り笑つた。

男には媚を売つてやり、女には嘲笑を。
女など、気にしてやるだけ時間の無駄なのだから。

小百合は、そつと呟いた。

「だつて、此処はわたしの世界」

可哀想で可愛い自分に、神様が与えてくれた世界。わたしの、わたくしのために創られた、わたしだけの世界。神にすら、愛された存在なのだと。

「わたし、みんなのこと大好きだよ！」

だから、わたしだけを愛せ。

小百合の美しい笑顔の裏に隠されたのは、いつたいなんだつただ
るつ。

椿 小百合視点 1（後書き）

今回はちょっと短め。

隠されたもの。本性はもう丸出しだから……。

5 講義録稿子（前書き）

なんだか書いてて私が楽しいだけの話になってしまった。

大和は今、悩んでいた。

未だかつてないほど、猛烈に悩んでいた。

眉間に皺を寄せ、いつになく真剣な表情につつかり胸をときめかせる者が続出するほど、悩んでいたのだ。
机上に広げたレシピを見て、大和は重々しく呟いた。

「苺大福か、それとも栗饅頭か……」

その呟きを偶然聞いてしまった大和の友人　宮城が呆れたよう
に言った。

「また和菓子か」

その声にやつと自分の傍に宮城がいるということに気がついた大和はフツと顔を上げ、宮城を見た。

「なんだ、宮城か」

「なんだってなんだよ、なんだって。ムカつく奴だな」

大和のあんまりな物言いに額に青筋を立てた宮城を華麗にスルーして、大和は訊ねた。

「何か用か？」

「ああ、忘れるところだつた。本多^{ほんだ}がまた来てたぞ」

「本多が……？」

うんざりといったような顔の大和が嘘であつてほしいという思いから再度訊ねても、返つてくるのは領きだけ。大和は深くため息を吐いた。

本多は野球部のキャプテンを務めている男である。彼は入学当初から類い稀なる大和の運動神経に目をつけていた。だが、当の本人は一番最初に声をかけられた調理部に菓子類が好きだということもあり、あっさりと入部。彼が悔しさに涙を流したのを知る者は多い。

しかし、彼は諦めなかつた。

大和が調理部に入部したその日から、彼の大和への熱烈なアタックが始まった。

ある時は昼食に誘い、それとなく野球の話題を出した。ある時は大和のその才能を野球に生かすことがそれだけ素晴らしいことなのか、ということを思いつく限り恋する乙女ばかりに綴つた手紙を何枚も書いては靴箱に忍ばせた。

いくら鈍い大和でも、これはさすがに気付いた。

この男は、自分を転部させようとしているのだと。

ノリと勢いで入ってしまった部とはいえ、何日も過じせば愛着というのも湧いてくる。

大和は「ゴキブリのように何処からでも湧いてくる本多に対抗して殺虫剤を持ち歩いた。そして少しでも野球の話をし始めれば、容赦なくスプレーをその顔面に吹き付けた。一歩間違えれば虚めに発展する大問題である。

だが、本多の執念は大和の頑固さの軽く上を行つた。本多は何日かしてからガスマスクを購入し、大和に話し掛けるときには常にガスマスクを着用した。

大和も、やつぱり頑固だった。もう素直に野球部に入ってしまえば楽だろうに、それだけはどうしても嫌だった。今度はそのガスマスクを剥ぎ取り、スプレーを吹き付けたのだ。

まだまだ負けていないのが本多だ。本多は翌日、懲りずに大和に話し掛けた。大和は既に手慣れた手つきで本多のガスマスクを剥ぎ取った。

瞬間、大和に戦慄が走る。

なんと、本多はガスマスクを一重に装着していたのだ。

しかし、怯んだのはたつた一瞬。^{ひる} そのガスマスクもやがて大和の手によつて剥ぎ取られた。

そして剥ぎ取られては増やし、剥ぎ取られては増やし、大和がいつぺんに剥ぎ取ったマスクが二十を超えたところで、とうとう諦めた。

今では苦手ではあるが、普通の友人のように接し、野球の話をし

始めれば横つ面をぶん殴つて無理矢理話を止めさせるといつ関係に収まっている。

しかし、前述したように、友人として認めてはいても、苦手なものは苦手だ。大和は嫌そうな顔で教室の出入口で立ちはだかる本多のもとへ向かつた。

「広崎！ 野球部に入る決心はついたか！？」

「富城、ハゲが何か寝言を言つてゐる」

「俺を巻き込むな」

「誰がハゲか！！」

本多は常にハイテンションな男だ。こんな朝っぱらから相手をするには少々ウザすぎる、大和は不快そうな顔を隠しもしないで教室のドアを勢いよく閉めた。一瞬で開けられた。

「何故ドアを閉めるか！」

顔を真っ赤にして怒鳴り散らす本多。大和はピクリとも表情を変えずに懐かしいメロディで歌い始めた。

「もしもお、頭髪があ、生あええたあならああ～」
「なんだその不愉快な替え歌は！ 俺は禿げてなどおりんと言つておろうが！ ただ人より少し髪の毛が短いだけだ！！」

だいたい、お前も俺より少し長いくらいではないか！と本多。そろそろ教室中の人が余りにも喧しい本多を睨み始めたところで大和が訊ねた。

「用はそれだけか？」

「そうだ！」

「帰れ」

大和は無表情でドアを閉め、今度は鍵もかけた、機転を利かせたクラスメイトがもう一方のドアを閉める。

「広崎！　おい広崎！！　開けないか広崎！！」

2・3の教室は、そのまま本多が叫び疲れて帰るまで閉ざされたままだつた。

「ところで、あいつも結構イケメンだよな。大和、どう思つ？」「何がだ？」

唐突に切り出された話題に大和はきょとんとして、後ろの席にいる宮城を見るために振り返った。

全く話の内容をわかつていかない大和に、宮城は説明をしようとし
て、閉口した。

「いや、良いや。多分、お前にはわかんねえだらうじ。
よく餌食にならねえなって話」

「……餌食？」

ますます話の意味がわからなくなつた、と大和は頭を抱えた。

5 調理部男子（後書き）

凄く馬鹿な話だけじ書いてて楽しかった。

美穂はいつもと比べると随分と機嫌が良かつた。最近はかなり機嫌が悪かつたのだが昨日大和に貰つたお菓子で全て吹っ飛んだ。本当に大和のお菓子は何かしらの力があるようと思ってしまう。それくらい美穂を幸福にしてくれるのだ、あれは。

しかし、そんな幸福はいとも簡単に別れを告げた。

「さつゆつりやーん！おはよー！」

「おはよー、みんな」

ニッコリと笑う椿。

ああ、今日もなのか…。だがこれは私が休むか、椿が休むかどちらかがないと回避することは不可能だ。まあ、自分から休む気などさらさら無いので後者に期待するほかない。

にしても、本当に人気者だな。

別に羨ましい訳ではないが、あそこまでモテる人を見たことが無いから目を疑うのだ。所詮私には関係ないが。

私があの場に居て勉強など集中できる訳が無く私は暇つぶしに大和の所に行くことにした。私は3・1だからそう遠くはない。鬱陶しい男子の声を聞かないように耳を塞いで部屋を出た。

向ひから誰かが歩いて来る。確かにクラスメートで野球部の本多だつたはずだ。騒動を何度か見かけていたので様子を見れば最初から最後まで分かる気がした。

「本多くん……、あなた『ブリみたいね』

「朝から失敬な奴め！」

大声で返してきたからとりあえずは元気なようだ。だが、元々私はハイテンションな奴は嫌いだ。それも朝からだと尚更。

「ちよつと黙つて。朝からうるさいのは迷惑」

「本当に坂田はひつ、もひ？！？」

本多の利き足であるひまつのすねを蹴った。鬱陶しい。教室に居る奴らと同じくらいに鬱陶しい。

「坂田ひ、…お前、風紀委員だろひー。」んなことをして、良いのか？！

「風紀委員だからこそのしつるんだけど？」

「……あ、悪魔！」

私がにこつと笑うと本多は掠れた声でそれだけ言つて蹴られた足（それほど強くは蹴つてないはずだが）を引きずりながら教室に戻つ

て行つた。

悪魔。なんか久しぶりに聞いた気がする。

よくどうしても聞かない奴に暴力を最終手段として取るのだが相手が去るとき、必ず悪魔だとか言われるのだ。

……いつも思うが悪魔と言つほど痛いのか？一応手加減はしているのだが…。

ガラリ、と扉を開けたつもりだったのだが開かなかつた、すると向こうでカチヤリとちよつと高い音。どうやら本多を追い返すために鍵をかけていたらしい、良いアイデアだ。今度使ってみよう。

「大和いる？」

近くにいた生徒（名前忘れた）に手短に伝えるとその子はすぐに呼んでくれた。ただ、なぜかは知らないが宮城がくつついてきた。

「あら、圏外が一人」

「誰が圏外だ、誰が」

「大和、今日は何作るの？」

まるで最初から居なかつたかのように宮城をスルーした。まだ不満そうだが一応口を閉じてくれた。

「苺大福と栗饅頭で迷つてゐるんだ。美穂はどうちが良い？」

まさかの質問返しで戸惑つ。その一択がどちらも和菓子というのが大和らしい。

「昨日はフルーツ食べたから今日は栗饅頭」

「分かつた」

嬉しそうに大和が笑う。大和が笑うとこっちもなんだか優しい気持ちになる。私もつられて笑った。

「お似合いだなあ、美穂と大和は」

一瞬、間。

大和は首を傾げ、私は赤面を隠すためとりあえず宮城のすねを手加減無しで、むしろ全力で蹴つた。
ガスッ、と鈍い音で宮城がしゃがみ込む。
というかいつから美穂って呼んでるんだ。

「み……ほ、痛いだろ……！」

「当たり前でしょ、蹴つたんだから。じゃあ大和、また後で」

「ああ」

宮城をスルーして、自分の教室に戻る。大分スッキリしたから勉強に集中出来そうだ。
教室に入るとき、ちょうど同じように教室に入りうよした椿に出くわした。

なんか睨まれたような、挑戦的な目で見られたような。しかし、教室に入った瞬間それは笑顔に変わり男子に囲まれていった。

それが逆に私の心に嫌な風を吹かせた。

6 パソコン部女子（後書き）

友人「今更ながら小百合ちゃんは難しい.....。
これからたくさん勉強せねば」

何を勉強するのか疑問な私。

椿 小百合視点 2（前書き）

今回は片岡の友人が書きました。

教室に入れば私の周りに男子達が集まつて来る。

みんな私に挨拶をしてくれ、気を引こうと必死にアピールする。今も自分がみんなから必要だ、と言われているようで嬉しくなる。自分が世界一幸福なのだと実感できる。

小百合は教室の入り口になんとなく目を向けると一人の女子が入ってきたところだった。

坂田美穂。転校してきた当初、服装が派手とか、髪を染めるなどが、一々注意してきた面倒な女だ。彼女が風紀委員長だと知ったのは大分後の話だが。

しばらく男子の話を適当に聞き流していると珍しく勉強家の坂田が勉強をしないで教室の外に出て行つた。

坂田が休み時間に勉強以外のことをするのはあまり見たことが無い。だからなのか坂田の行き先が気になり、男子達にお手洗いに行くと嘘を言って引き離し、後を追つた。

近付くことは無理なので遠くから見ていると、坂田はまず本多と話した。

ところが本多には用が無かつたらしくある程度話（と蹴り）をすると彼と別れ、更に進んで行つた。

しばらく見ていると坂田は2・3の教室で止まり、誰かと話をし始めた。

だが、それも極短い会話だった。これ以上は何もなさそうだと思い、教室に戻ろうとした時だ。

2・3から男子が一人、出て来たのだ。特に一人の男子が気になつた。

恰好よかつた。

黒髪で、爽やかな笑顔が良く似合つている。
ほんやりとその男子を見ていて気付く。

あの人を、知らない。

誰、誰なの。あの人は誰。知らない、あの人の全部を。なんで、もう男子は全部わたしのもののはずなのに。わたしはあの人を知らない。

しかも、あの人と坂田が笑い合つてゐる。わたしは知らないのに、なんであの女が知つてゐるの。

坂田が戻ってきた。我にかえつて偶然を装つとして教室に今戻つていくふりをした。

坂田と目があい、睨みつける。しかし、すぐに笑いに戻し、教室に入つて行つた。

あの人をあなたから奪つてあげる。男は全部、わたしのもの。誰か他の人なんて、させない。

自然と口に笑いがこぼれていた。

椿 小百合視点 2（後書き）

美穂は書けるのに小百合ちゃんを上手く書けない……。
これから更に頑張らないとな……。

「わたし、椿 小百合つていうの。よろしくね」

「……？ うん、……うん？」

突如として目の前に現れ、よろしくしてくれという少女に、大和は頭の上にいくつも疑問符を浮かべながら頷いた。大和の視界の端で宮城が苦虫を噛み潰したような顔をしていた。

唐突。突然。まさにそれだった。なんの前触れもなく、彼女は現れ、大和の目の前で美しく笑ったのだ。

微妙な反応を返した大和に、小百合の美しい笑顔がほんの少し歪んだ。

「広崎くんつていうんだよね」

「ああ、そうだ。どうして俺の名前、知ってるんだ？」

宮城が大和の後方で、小さくストーカー……と呟いた。その声は幸か不幸か大和には届かず、宮城が小百合に壯絶な笑顔を向けられただけであった。

「坂田さんから聞いたの。わたし、坂田さんとお友達だから」

「へえ、美穂の友達なのか！」

「うん、とっても仲良しなんだ」

大和の満面の笑顔に、これまた満面の笑顔を返す小百合。この場面だけを見ればとても微笑ましく、お似合いの二人に見えるのだが、生憎とクラスにいた人間たちには一人の姿は蛇と蛇に捕食されそうになっている小動物にしか見えなかつた。

「ねえ、大和くんって凄く恰好良いよね。わたし、恰好良い人大好きなんだ」

いつの間にか名字呼びから名前呼びに変わつている小百合。しかし、大和はそれを意に介することもなく（気付かず）、言い放つた。

「へえ、面白いなんだな」

大和がそう言つた時、小百合の笑顔が完璧に崩れた。華のかんばせを笑顔で彩ることを忘れ、目を丸くした小百合は、それから取り繕うような不自然さもなく、ただ微笑んだ。

頭のネジが数本吹つ飛ぶどころか消し飛んでいる大和がそんな小百合の表情の変化を気に留めるわけもなく、ただにこにことしていた。

「……大和くんは、なんの部活に入っているの？ 運動部……、サ

ツカーとか野球とか、似合いそうだよね

「調理部だ。和菓子が好きなんだ」

「、調理部？」

そうだ、と頷き、大和は逆に訊ねた。

「椿はなんの部活に入っているんだ？」

「わたし、帰宅部なんだ」

「へえ、無趣味なんだな。つまらなくないか？ 人生」

背後で宮城が噴き出した。今度はさすがに気付いた大和が不思議そうに後ろを振り返る、大和の目に映る宮城は何故か蒼褪め、冷や汗を搔いていた。

何か後ろに恐ろしいものもあるのか、と視線を前方に戻しても見えるのは小首を傾げて微笑んでいる小百合。大和は首を捻った。

また小百合が口を開こうとしたとき、物凄い勢いで教室のドアが開き、その拍子でドアが外れてしまった。

大和が嫌々目を向けると、其処には予想通り過ぎてなんの面白みもない男が立っていた。ご察しの通り、本多である。

「広崎い！ 野球部に入れ！！」

「断る」

「……本多くん？」

小百合が困惑の色が入り雑じつた笑顔を向ける。小百合の存在に気付いた本多は目を輝かせた。

「おお！　お前は椿！　我が野球部マネージャー候補の椿ではないか！」

「野球部に入るのか？」

「えつ？　え、あ、いや、違うよ？　本多くんが勝手に……」

その言葉に全てを悟った大和は睨むように本多を見て、低く言った。

「本当にお前は人に迷惑をかけるのが好きな奴だな、ハゲ」

「俺はハゲではない！…」

「あの、本多くん……」

延々に続きそうだったハゲか否かの論争に、小百合が終止符を打つた。本多は不意にかけられた声に小百合を見、そして大和もまた小百合を見た。

一気に二人分の視線をその身に浴びた小百合は氣まずげに、するはずもなく、平然と言つた。

「本多くんは、どうしてわたしに野球部に入つてほしいの？」

その質問を待っていたと言わんばかりに、本多は笑んだ。

「お前は野球部の部員に人気があるからな！　お前が野球部に入れば部員たちの士気も上がるだろうと、」

「……本多くんは？」

「は？」

小百合の問いの意味を理解出来なかつた本多が間抜けな声を出す。その後方ではすっかり蚊帳の外になつてしまつた大和と富城が窓の外を見てあの雲はずんだ餅に見える等と議論を交わしていた。

「本多くんはどう思つてるの？」

「特になんとも思わん！」

笑顔で言い切つた本多。クラス中の人間が一斉に俯き肩を震わせた。小百合の笑顔も引き攣つっている。

「そう……。じゃあ、わたし入らない

「何故だ！？」

「大和くん

「なんだ？」

悲壮感溢れる表情になつた本多を無視して、小百合は大和の名を呼んだ。もう話は終わつたのか、とのんきな顔で大和は小百合のほうを向いた。

「これから、仲良くしてね」

「……うん？」

「なんだ！ 椿は広崎に惚れてるのかー…？」

小百合は感情の読み取れない笑顔のまま本多を見た。大和はきょとんとしている。宮城は苦々しい表情。そんな中、本多だけが輝かしい笑顔を見せていた。

「そうか！ ならば広崎！ やはりお前は野球部に入るべきだ！ そうすれば椿もきっと釣れるはず！」

大和はウザつたそうな顔で本多を見た。だから、どうしてそな
るんだ、と。何も自分でなくとももつと良い人材がいるだろう、と。

「はい、ストップ」

本多がまた何かを言おうと口を開いたところで、思わず乱入者が
やってきた。美穂だ。

「あれ、美穂だ」

「はい、美穂です。宮城、名前で呼ぶな

「なんで俺だけ！」

美穂は小百合と本多を見ると一人の腕を掴み、教室の外へと連れ出した。

「おい！ なんだ坂田！ 離せ！」

「きやつ。坂田さんつ、離して！ 痛いっ……！」

「良いから出るー！」

何か知れないが、美穂は怒っているようだ。とりあえず大和はとばっちりを喰らわないように教室のドアを閉め、鍵をかけた。着実に厄介を遠ざけるための経験値を積んでいる大和であった。

7 調理部男子（後書き）

普通に関わっていますな。あらすじに偽りあり、びりしそう。
でも一応（多分）つてしておいたから大丈夫かな。

早速あの黒髪の彼に接触を試みようと、小百合は群がる男共を適当に追い払つて教室を出た。

すぐ隣の教室を覗き込むと、いた。思わず笑う。

それにも、と小百合は不思議に思つた。こんな近くにいたあの人、大和のことを自分が知らなかつたというのも不思議だが、それよりも、このクラスにいる人間たちは、どうして自分の存在に気が付いているだろうに、全く騒がないのか。

小百合は疑問を抱きながら教室に足を踏み入れ、真っ直ぐに大和のもとへ向かつた。

「ねえ」

「なんだ?」

呼びかければ、大和は振り向いた。ああ、近くで見るほうが、もつと素敵。小百合は大和に微笑みかけた。

「わたし、椿 小百合つていうの。よろしくね」

大和は戸惑いながら頷いた。今までのどの男たちとも違つその反応に、小百合も戸惑つた。

「広崎くんつていうんだよね」

「ああ、そうだ。どうして俺の名前、知ってるんだ?」

「坂田さんから聞いたの」

勿論、嘘だ。

本当は周りにいた男たちに聞いた。坂田と親しい男子の名前を知つてゐるか、と訊ねると、すぐに大和の名前が挙がつた。
それほど、坂田が男子と仲良くしているのが珍しいことなのだろう。

「美穂の友達なのか!」

「うん、とっても仲良しなんだ」

そうか、そうか、と嬉しそうに頷く大和。小百合には、大和が嬉しそうにしている姿よりも“美穂”といつ言葉のほうが気になつた。

(どうして名前呼びなの……！？)

そんな苛立ちを必死に隠しながら、小百合は話を続けようと口を開いた。大和は、この言葉にいつたいどんな反応を返すのだろう、と。

「ねえ、大和くんって凄く恰好良いよね。わたし、恰好良い人大好きなんだ」

間髪入れずに大和は返した。

「へえ、面白いなんだな」

につ、こりと笑つて吐き出されたその言葉に、今度こそ小百合の笑顔が固まった。

そして、小百合自身は氣が付いていなかつたが、小百合は目を見開いて、それはそれは本当に可愛らしい無知な少女のような顔をしていた。

いきなり恰好良い人が好きなの等と言われたら大和の反応は至極当たり前のことなのだろうが、小百合の周りにいた男たちは違つたのだ。

そう言うと、男たちは決まって自分たちを少しでも良く見せようと無駄な努力をする。

だからこそ、小百合に媚びることなくそう言ってみせた大和が、小百合にはとても新鮮に映つた。

小百合は本心から微笑み、口を開いた。

「……大和くんは、なんの部活に入っているの？」

爽やかで、なよなよしたところなんて何処にもない恰好良い彼のことだ。きっと運動部のどれかに入っているのだろう。そんな思いを込め、小百合は訊ねた。しかし、大和の答えはそんな小百合の予想を大きく外れた。

「調理部だ。和菓子が好きなんだ」

「、調理部？」

まさかの文化部。何処までも予想通りにいかない大和に、小百合は不可解な胸のときめきを感じた。

今度は大和が訊ねた。お前は、なんの部活に入っているのだ、と。

「わたし、帰宅部なんだ」

「へえ、無趣味なんだな。つまらなくないか？ 人生」

まさか人生をつまらなくないかと問われるなど思いもしなかつた。小百合は目を瞬かせ、向こうのほうから聞こえた笑い声に淵みのある笑顔を向けた。

まだ、この人と話をしたい。底が見えなくて、新鮮なこの人と。小百合が口を開くと、教室のドアが思い切り開かれ本多が入ってきた。小百合は驚き、口を噤んだ。

本多は大和に向かつてギヤンギヤンと喚いている。思わず名を呴くと、本多は目を輝かせて小百合を見た。

小百合は、前々から自分に媚びようとしない本多が嫌いだつた。せっかく自分が笑いかけてやっているというのに、そんな自分の魅

力に気が付かない阿呆な男。

しかし、ようやく自分の魅力に気が付いたのか、と小百合は微笑む。しかし、吐き出されたのは全く違つ言葉。

「我が野球部マネージャー候補の椿ではないか！」

やはり、阿呆は阿呆だったか、と小百合は最早諦めの境地にいた。何故かそれを見て勘違いをしてしまった大和に説明をする。すると、大和は本多を軽く睨んだ。

「本当にお前は人に迷惑をかけるのが好きだな、ハゲ」

「俺はハゲではない！！」

「は、ハゲ……」

まるで漫才のようだ。小百合は誰にも聞かれないように小さく呟いてから大和の考察をした。

（なにこれ……。天然毒舌爽やかスイーツお笑い系男子？ どれだけ設定詰め込んでるのよ）

「あの、本多くん……」

小百合はふと、疑問に思つた。この男は自分に落ちていない。な

ら、どうして其処まで自分を野球部に入れたがるのか。

しかし、阿呆は何処までいっても阿呆で、返ってきた答えは“部員の士気が上がるから”。果てには“特になんとも思わない”。この男は喧嘩を売っているのだろうか。

まあ、良い。こんな男。相手をしてやるだけ無駄だ。小百合は大和に向き直った。

「これから、仲良くしてね」

「……うん？」

「なんだ！ 椿は広崎に惚れてるのかー？」

喧やかましいぞ、この腐れ脳味噌。小百合は自分がそう叫び出さなかつたことが心底不思議だった。

本多がまた喚きだそうとしたところで、また邪魔者が入った。

「はい、ストップ」

本当に邪魔な女だ、と小百合は唇を噛んだ。親しげに大和と話し、あまつさえ見せ付けるように名前で呼び合つて。

坂田は小百合の腕を思い切り掴み引っ張った。痛みに悲鳴を上げても坂田は愚か、クラスにいる男子たちもなんの反応も見せない。

小百合はそのまま、坂田の手によつて教室から追い出されてしまつた。

椿 小百合視点 3（後書き）

小百合視点のときは美穂が坂田呼びなのがポイント。
視点つて言わないかな、これは……。

8 パソコン部女子（前書き）

今更ながら言い忘れていましたが、後書きは友人の言葉です。

朝は結構良いことがあったため、昼休みはかなり良いペースで勉強が出来ていた。そのお陰か今日のノルマはすぐに終わらせることが出来た。

ん~、と体を伸ばしてふと気付く。

いない。あの椿が珍しく教室に居なかつたのだ。男子の取り巻き共は暇そうに椿の机の周りで待つてゐる。お前らは犬か。

ガタガタと騒がしい音を立てながら本多が出て行つた。きっとまた大和に交渉しに行くのだろう。

ただ、平穀な昼休みを騒音に変えられではたまつたものではない。どうやらもう少しお灸を据えてやる必要があるようだ。

美穂は溜息をつきながら立ち上がり、本多の後を追つた。

教室を出てすぐガタン!と騒々しい音、原因は見なくても分かる。本多は夢中になると他がどうでもよくなる悪い癖を持つ。そこも説教せねば、ヒズカズカと歩いていく。

「本!……多!……?」

椿が居た。しかも大和と話してゐる。幸い向こうは私の事に気づいていないようだ。……椿が大和の存在に気づいてしまつた。しばらく自分の仕事を忘れて呆然とし、やつと思考が働きはじめた。

とうあえず説教

これしか頭のなかに無かつた。それだけ椿に大和が狙われていることがパニックになつていた。

「はい、ストップ」

「「あれ、美穂だ」」

大和と宮城が一斉に言つた。本当仲が良い。
というか宮城がここに居たことを今気づいた。宮城ってそんなに存在感無かつたつて、と疑問に思つたくらいだ。

「はい、美穂です。宮城、名前で呼ぶな

「なんで俺だけ！」

答えは簡単。

宮城とは親しくもないし、呼んでいいとも言つてはいけない。いつからこんな親しげになつたんだ。

ともかく仕事に入ることにした。大和には小さく謝つてから二人の腕を掴み、引き摺る形で教室から出していく。

「おい！なんだ坂田！離せ！」

「きやつ。坂田さんつ、離してー痛いっ…………！」

「良いから出るー」

黙らせるために少し腕に力を入れるが、椿だけは黙らずに騒ぎ、教

室に着き放すまでつるさかつた。

.....

「本多、何回言つたら分かるの。人が断つたら諦めなさいー迷惑で
しちうがー！」

「そんなことは俺の自由であるつー！」

「黙れ、扉を外したことば言い逃れさせないよ」

本多にゲンコツを入れ、黙らせる。

今、私は教室で二人を正座させて説教をしていた。考えれば椿を説
教する理由はどこにもないのだが、この際どうでもよかつた。
早くも正座に疲れたらしい椿が正座をやめる。だがそれを私が見逃
す訳がない。

「椿、正座を崩すなーー！」

椿と小百合ちやん親衛隊が二つを睨んだ。親衛隊は殺氣立つてい
る。

美穂はそれら全てを脅しも含めて睨み返した、関係ない奴らまで退
いている。

「大体椿が来てからこの学校（男子のみ）は変わったわ！服装を違
反する奴は出るわ、不登校（椿に興味が無い男子が親衛隊に襲われ
た）は出るわ、散々よーー！」

おまけに大和にまで餉食にする気が、と美穂は言いそうになつてそれを飲み込んだ。椿は涼しい顔をして受け流しているようだ。

美穂は苛立ち、椿の顔を片手で掴んだ。

「つ、な……！」

「あまり調子にのりないで。学園生活乱されると勉強に集中出来ないから」

低い声でそう告げ、説教を終わらせた。そのまま自分の席に戻り、座つた。

自分を見る視線が何時にも増して痛かつた。

8 パソコン部女子（後書き）

最近小説を見る回数がかなり増えた。ついつい上手い人と自分を比べてしまう。
……下手くそな自分に泣けてくる。

教室に連れ戻されると強制的に正座をさせられ、坂田の説教が始まった。

（なんでわたしまでこんなことを………）

正直小百合は苛立っていた。大和と離されて、腕も思い切り掴まれたのにその上説教。教室の隅では女子共が私をいい気味だと言つようくスクスクと笑つている。

こんなにも屈辱的なことがあるだらうか。

本当に邪魔な女、そうボソリと呟き坂田にちゃんと正座をしろ、と怒鳴られた。更に苛立ち、睨みつければ睨み返される。後ろに居るわたしの親衛隊も黙り込んでしまつた。使えない、わたしをちゃんと助ける。そのための親衛隊だらう。

それにして本當になんの、この女は。お前だつて所詮は敗者、なのになんで、なんでわたしにたてつくの。

ここはわたしの世界、全てわたしだけのものなのに、それなのになんであなたは………！

唐突に顔を片手で掴まれる。片手なのに抵抗できない、しつかり掴まれている。一体この細腕にどれだけ力がある……。

「あまり調子にのらないで。学園生活乱されると勉強に集中出来ないから」

嫌に坂田の低い声が響いた。本多には聞こえなかつたのか、まだ痛

がっていた。

坂田は説教を終わらせて自分の席に戻つて行った。
男子達が自分を心配して頻りに話しかけてくる。小百合はそれを適
当に聞き流し坂田を見据える。

もう絶対に許さない。大和を、あなたから必ず奪つてみせる。
後悔しても、遅い。

椿 小百合視点 4（後書き）

無いものを搾るって難しいですよね。私の場合は想像力ですが…。

「ああ、もう！ なんなんだよあの女っ！ なあ、君もそう思つだろ！？」

「な、夏輝^{なつき}、落ち着いて……」

「なんだよつ！ 菖蒲^{あやめ}だつてそう思つてるだろ！？」

大和は眉を下げながら、一言だけ言った。

「……ご愁傷様？」

自分の城とも言える調理室で、何故大和がこんな不憫な目に遭っているのか。それを知るには、少し時を遡らねばならない……。

今から一時間前。大和は今日も部活動に勤しんでいた。
今日はどう焼きを作ろう。そう張り切つて冷蔵庫を開けた大和が目にしたもの。

これが、大和の最初の不幸だった。

「……餡がない」

どら焼きを作る為には必要不可欠な餡を、今日に限つてちょうど切らしていたのだ。ちなみに、大和はどうにかにカスタードクリームだとかいつたものは邪道だと考えている。

「仕方ない、買つてくるか。先生！ 金！」

「先生、こんな堂々と教師から金をせしめようとする生徒は初めて見た」

「でもそんなことを言いつつ金をくれる先生が好きです！ アイラビュー！」

「ドントタッチミー」

存分に顧問である一階堂とふざけ倒した大和は部員一人を見て言った。

ちなみにこの部は廃部寸前である。しかし、寸前であるだけで何故廃部にならないのかは誰も知らない。

「俺は餡を買いに行つてくるけど、俺がいないからつて変なことをしないように！ 茄で卵はレンジで作るなよ！」

「わかりました！」

そんな部員一人の力強い返事の後に、チーンと軽やかな音。そして破裂音。

「おい今何か聞こえたぞ！」

「卵が爆発しました」

「もういい。広崎、行つてこい。ここからは俺がしめとく」

大和は後ろ髪を引かれる思いで調理室を後にした。

廊下に出ると大和は真っ直ぐに購買を目指し始めた。

購買には弁当やパンの他にあまり買う人間はいなさそうなジャムなども売っている。きっと、餡も売っているだろうと大和は思った。

しかし、

「え、売り切れ！？」

「そうなのよ。ほら、最近転入してきた可愛い子、いるじゃない。なんでもあの子があんこが食べたいって言い出したらしくて、男の子たちが……、ね」

「…………」

最近に転入してきた女子など小百合しかいない。大和の中で小百合的好感度がちょっと下がった。それと同時に大量の餡をいったいどうやって消費する気なのかと気になつた。

落ち込む大和を見かねた購買のおばちゃんが、少し困った顔で大和に何かを持たせた。

「……おばちゃん？」

「本当は「じつ」こと、しちゃいけないんだけどね。可哀想だからおばちゃんからのサービス。それにもあんこは入ってるから」「…………」

大和が持たされたのはどら焼きだった。

どら焼きを引き裂き、中身の餡を取り出し、その餡でどら焼きを作る。なんだか意味のわからない工程である。

しかし、これの他に餡はなく、大和はおばちゃんの「厚意に甘えてどら焼きを持ち帰ることにした。
ゆうくり購買を出て、廊下に差し掛かった。

そして、此処で大和を第一の不幸、基元凶が襲う。

「転んだあああああッ！？」

「夏輝いいいい！」

「ッな、」

何かが落ちてきた。そう思ひ間も無く、大和は“それ”に押し潰された。

わざとかと思つくらい真つ直ぐ鳩尾に落とされた打撃に大和は思わず涙目になつた。

「つぐ…………！？」

「な、夏輝！ 大丈夫…………！？」

「ん！ だいじょーぶ、だいじょーぶ！ この少年が身を挺してあたしを庇つてくれたから！」

「勝手に事実を捏造するな……！」

とりあえず退いてくれ、と大和は自分の上に乗っている女の肩を叩いた。女はからからと笑いながら囁つ。

「なんだ、なんだ。つれない奴。普通、ナイスバディの女が自分の上に乗つてたら興奮するもんだろ」

「可笑しいな、まな板しか見えない」

「脳味噌引き摺り出されてーのか」

額に青筋を立てた女は、今度は素直に大和の上から退いた。酷い目に遭つた、と大和が腰を擦る。

すぐ傍でおどおどしながら自分たちのやり取りを見ていたもう一人の女が恐る恐る大和に声をかけた。

「あ……あの、大丈夫……？」

「一応、身体は丈夫なほうだからな。大丈夫だ」

「そう、良かつた……。夏輝がごめんね」

「ん！ 悪かつたなー！ 少年！」

「もう良い……」

どうしてこいつは同級生だろうに自分のことを少年などと呼ぶのか。しかし、今の大和にはそんな疑問を指摘する気力も無かつた。大和は疲れ果てた表情で言い捨てた。そしてどら焼きが潰れていなかを確認してから立ち上がる。不幸中の幸いとでも言うのだろう

うか、どら焼きは無事だった。

それじゃあ、これで、と大和がさつさと傍迷惑はためいわくな女たちから逃げ出そうとすると、夏輝と呼ばれた女が大和の顔をじいつと見て、何かに気付いたような顔をした。

大和は物凄く嫌な予感がした。

「……ん？ あれ？ 君、広崎 大和か？」

「え……？」

「……夏輝、知り合いなの？」

「いや、うちの副部長の彼氏」

その言葉に思い当たる人物がいたのか、もしかして、と大和も思う。

「美穂の部活の、部長か？」

「そう、大正解！ そういう君は美穂の彼氏」

混乱する頭で、大和は一言だけ言った。

「……違うぞ？」

そして何故か冒頭のような事態になってしまったわけである。

大和が調理室に戻ろうとする、何故か夏輝たちも大和について

きた。なんの用だと言えば和菓子を恵んでほしいのだと呟つ。

和菓子が好きな奴に悪い奴はないというのが持論の大和。夏輝の言葉に少しだけ上機嫌になり、喜んで夏輝たちを招き入れた。

しかし今、大和はその持論を撤回したくて堪らない。

「だいたいあたしの菖蒲を貶すとかいつたい何考えてんだろうな、あの雌豚は！ 醋豚にすんぞこら！！！」

「な、夏輝っ……！ お願ひだから落ち着いて……！」

先程から菖蒲が なんと、生徒会長らしい なんとか夏輝を宥めようとしてくれているが、それでも夏輝は止まらない。それどころか、調理室にある食物を全て消費しようとしている。

後輩たちは夏輝に怯えているし、唯一対抗出来そうな二階堂はさつさと調理室を出ていってしまった。

いつになつたらこいつらは帰ってくれるのか、大和は泣きたくなつた。

9 調理部男子（後書き）

ちなみに、私はどら焼きはカスタードクリームとかじやないと食べません。

10 パソコン部女子（前書き）

小百合ちゃんがあんな過激な発言しどこで全然出てしなくなってしまった……。

「ぬが――――出来ない！なんなんだ、これは……」

「落ち着いて！パソコン壊そりとしないで……」

「ああ、部長。貴女は今日も来ないのでですか……」

「副部長ー、これどうやるんですかー」

「ねーむーいー……。ぐう……」

新入生久しぶりに一人を除いて全員集合。ちなみに残りの一人は例の親衛隊に襲われ不登校になつてている。

新入生は上から白川くん、しらかわ 杯田さん、はいだ 滝下くん、たきした 町谷さん、まちや 矢崎さん。やさき なんとも個性的、というより濃すぎる部員達だ。ちなみに最近は町谷しか来ていなかつたから、一応新入生は集まつた。だが、ここまで來るとさすがに面倒だ。

「矢崎、とりあえずあんた起きて」

「いつたあー？……副部長いつもあたしに酷すぎません？」

「寝てるあんたが悪い」

「えへ、ちょっとだけじゃないですか」

「一日二回以上は寝るの?」

「……」

黙り込む矢崎。言い返せないからだらうけど矢崎一人だけ相手をし続ける訳にはいかない。

振り向くとなんと杯田が公共物を壊そうとしている白川と部長「〇×E」とうるさい滝下を峰打ちで黙らせていた。峰打ちだけは天才的な確率で急所を狙える杯田、ナイス。

これならしばらく置いておいても平氣なようだ。そういうえば大和が今日はドラ焼きを作ると言っていた。少し抜け出して食べに行こうか。

美穂は杯田に任せ、パソコン室から出た。

……

パソコン室と調理室は階が同じになつてゐる。代わりに少し距離が遠い。歩きはじめたところで調理室から出てきた二階堂に会つた。

「ああ、坂田。お前ちよつと頼むな」

それだけ言って二階堂は去つて行つた。

何を頼まれたのかさっぱり分からぬ美穂は調理室でその理由、原因、自分がするべき事がすぐに分かつた。

「部長……」んな所にいたなんて………」

部長が居た。生徒会長も居る理由は知らないが部長は調理室の食料を食い漁っていた。大和が涙目で助けを求めている。事態は結構深刻なようだ。

「とにかく、行きますよ。」迷惑おかげしましたー」

「わーん、助けて菖蒲——」

「え、…え？」

重い。ものすく重い。恐らく部長が会長へつづいて会長まで引きずっているのだろう。

だがここに部長が居ては害虫同然。おまけに大和は完全に部長に負けていて追い出すのは不可能だろう。まあ、じつも揃つたらやりたいことがあつたからちょうど良い。

「歩くからー、歩くから副部長放してよー」

「放したらまた逃げるでしょ?」

「ケチ」

「うるせー、部長なんだから仕事するーー!」

いつも思つけどこの人本当なんで部長になつたんだろ。副部長でもいいのに何故部長。本当にこの人ミステリアス。

「着きましたよ、今日せいやんと話しあつますから。会長すいません」

「あ、いえ、大丈夫ですか」

「じゃあやつこいつ訳で」

「逃げるな、部長」

慌てて部長を捕まえ、とつあくせき議論に入る」とした。会長は部長の無理なお願いで「ここにこる。

「えー、それじゃあ、」

「おお、遅っこ部長……やつと来ててくれたのですねー。」

「うわあ?...」うち来んな...気持ち悪い...」

「杯田、峰」

「了解です」

「ぬなつ...」

滝下、沈黙。杯田が入部してくれて良かった、すげー助かる。部長にアイコンタクトをして話を進めるように促す。

「えーっと、今日は文化祭の出し物を決めるんだって。なんかいいのある?」

「部長、会長?」へこむこむけやんと並んで立ってる

「こーじゅん」

「良くないですか」

うーん、考え込む部長。しばらくして何か思いついたのか手をポン、
と品書きのひつを「ヤリ」と見た。……嫌な予感しかしないんだけど。

「よし、どうせ人数少ないしね、調理部と合同でクッキー作り、
クッキー」

「え。ちよ、ちよっとそんなことして良い説が……」

「部長命令」

「で、でも

「何か問題でも?」

態とだ! 絶対態とだ、私が料理駄目なの知つてやつてる……もしか
してさつきの根に持つてるのか……? だとしたら怖いな、とこりか逆
恨みでは?

「良じよね、菖蒲!」

「私は、良じと想ひ……」

「よしきたー! 生徒会会長の許可貰つたし、調理部行つてくれるわー!」

会長を引っ張つて部長せつとつと出て行つた。珍しく部長の目が輝
いていて仕事にやる氣を持つのは有難いがそんな形で持つてほしく
ない。

「クッキーか。俺は辛い方がいいな」

「白川くん、それってクッキー？」

「……あれ、部長はー? 何処に行ってしまったんだ、愛しのハニー
……」

「副部長ー、結局これどうするんですかーー」

「むにゃ、もつ食べれないよう…」

……とつあんず」こつら説教かな。

10 パソコン部女子（後書き）

友人「最近さらに想像力が乏しくなっていく気がする…。頑張れ私の脳。」

友人が無駄に登場人物を増やし過ぎて、誰が誰だかわからなくなってしまったことを、友人の代わりに私が謝罪致します。申し訳御座いません。

騒がしい足音が徐々に調理室のほうに近付いてくる。逸早く異常を察知した大和は調理室のドアを閉めようとしたが、一步遅かつた。ガラリと勢いよく開かれたドアの向こう側に立っていたのは先程の迷惑な女。大和は女 夏輝にラリアットを食らわせたくて堪らなかつた。

「少年、少年！ 君の愛しのパソコン部部長様が会いに来てあげたよ！」

大和は本心をありありと表した表情を必死に隠し、ある一角を指差しにこやかに言った。

「お前の居場所は調理器具置き場だぞ？」
「あたしはまな板じゃねえ！」

夏輝は顔を真っ赤にして怒鳴つた。
やはり、これだけでは帰らないか。まな板はまな板らしく大人しくしていれば、まだ少しは可愛げというものがあるのに。大和はまな板を前にかなり失礼なことを思った。

大和は、今度は出入り口を示して言った。

「あの出入り口が見えるか？」
「帰れってか」

大和の辛辣な物言いに対し、なんとも的確な突っ込みを返す女である。

嫌だ嫌だとは思っていても、一応慣れてきたのか、幾分か冷静な対応をする大和。

「とにかく、お引き取り下さい、まな板部長」

「君が息を引き取れ」

「この世に要らないものって、たくさんあると思うんだ。煙草とか、お前とか、ゴキブリとか、お前とか、ハゲとか、お前とか」

だんだんと目が剣呑な光を放ってきた大和を見て、夏輝は思わず冷や汗を垂らした。これ以上は、まずいかもしれない、と。

大和の後ろに避難していた後輩たちも、いつもとは違う大和の雰囲気におろおろしていた。

そんなとき、軽快な音と、次いで破裂音。

大和はゆらりと振り向き、後輩一人を見た。ホラー映画さながらの不気味な動きに怯える一人。

「……お前たちも、要らないのかなあ……？」

「ああああッ！！ 少年！ 少年少年！ 今度はちょっと、本当に用があつて来たんだ！ まずはあたしの話聞いてくれーーー！」

「ふうん……、なるほど。パソコン部と合同で、か……」

「うう……。あたしは女だぞ……。何も本気で殴ることはないだ
う」

調理室の椅子に座り、涙目になりながらこぶが出来てしまつた頭を擦り、夏輝が言った。大和は夏輝の真正面に座り、夏輝を冷たい目で見つめている。

大和は夏輝の涙まじりの声に平然と返した。

「鏡なら其処にあるぞ？」

「貴様！」

何処までも酷い奴である。

大和は場を仕切り直すよつて、一度だけゴホンと咳払いをし、口を開いた。

「……何故、部の趣旨が全く違つ俺たちを合同の相手に選んだのか

は理解出来ないが、うん、良いぞ

大和は後ろを振り向き、後輩一人に訊ねる。

「お前たちも、良いよな？」

「勿論ッスよ部長！」

「私たちが部長の成すことに反対するわけがありませんってー！」

「そ、そうか……？」

何故か態度が急変してしまった部員たちに大和は首を捻る。部員たちはすっかり大和に怯えてしまっていた。

「まあ、君らの了解が取れたのは良いとして……、顧問の先生のほうはどうなんだ？ 一階堂先生だつけ？」

夏輝が大和に訊ねる。夏輝は阿呆に見えて、中々しつかりとしている。

大和は問題ない、と首を振る。

「あの人は部活のことほとんど俺に任せであるから、大丈夫だと思う

「そか。ならいいや」

夏輝は軽く頷き、椅子から立ち上ると軽やかな足取りで出入り口まで向かった。

そのまま出ていくのかと思いきや、あ、と何かを思い出したような声を出して、大和を見た。

「なんだ？」

「お菓子は？」

「帰れよ」

大和は夏輝を蹴り出して調理室の鍵を閉めた。

現時点では大和の中での夏輝の立場は本多^{ハナ}と同列であった。

11 調理部男子（後書き）

夏輝の口調が迷子。

今、美穂はかなり悩んでいた。放課後という絶好の勉強タイムなのに、勉強にも手をつけず、ただ悩み続けていた。ちなみに今日は部活が無い。

原因はこの前部長が強制的に決定した文化祭の出し物だ。

料理、それは美穂が全く出来ないものの一つだつた。小さい頃少しあつていた記憶はあるのだが、出来ない。一度大和とプリンを作ろうとして、絶対食べれそうにない奇妙な液体が出来た。未だにどうしてそうなったのかわからない。

「坂田さん、どうかしたの？」

声に顔を上げて固まつた。椿が目の前に立つていたのだ、勿論男子を従えて。

前に説教をしたときとまるで態度が違つ。これが七変化か、凄いな。少し躊躇があつたが避けてばかりはさすがにまずいだろうと思い、話すことになった。

「椿さん、さんは料理は作れる？」

最近は椿と呼んでいたので、さんを後から取り付けた。少し表情が動いたので多分本人も分かつたと思つ。だがそこはさすが椿といふかすぐに笑顔で返してきた。

「作れるよ。でもそれがどうかしたの？」

首を傾げて今度は椿が質問していく。「これには答えることは出来なかつた。料理が出来ないなんて、椿には口が裂けても言えなかつた。言つたら馬鹿にされるのがオチだ。

ところで今氣付いたが椿自身、女子に話しかけるのが珍しい。何かあつたのだろうか。

「何でもない。ちょっと聞いてみたかつただけだから」

なんだか追求されているような気がして美穂はそのまま会話を終わらせた。逃げるように教室を出て3・2に向かつた。料理関連では大和に頼るしか無いだらう。そう考えてのことだった。

「大和、いる?」

大和はいた、が呼ぶと宮城もついて來た。なんであんたも来るんだ。

「大和、その、文化祭のことなんだけど……」

「ああ、クッキーのことか」

「作り方、教えてくれないかな?」

「「作り方?」」

二人が同時に言つ。二人とも目が点になつてゐる。やがて宮城がなにかに気付いたらしく笑いはじめた。

「美穂、料理駄目だから大和に……? ふはっ!、笑えるーーー」

「う、うるさい富城……と、うかなんて知つてゐるの…」

「えー、結構有名だよ? 女のくせに料理出来ないって」

「女のくせにとか言つたな…」

思いつ切りすねを蹴つてやつた。前と同じように痛がる富城。それよりも皆が私の料理下手を知つてることで、この事実が恥ずかしい。

「で…、いいかな、大和」

「いいよ」

すんなりと一解を得ることが出来た。足元ではまだ富城がうずくまつていて、あと1時間そうしてゐる。

とりあえず大和から了解は取れたので、いつやろうかと聞いたら今日でも良いと言う。私はその言葉に甘えて今日クッキーを教えてもらひことにした。

12 パソコン部女子（後書き）

友人「変に混乱させるような事をして申し訳ありませんでした。これからはそれらも配慮して頑張つていいくのよろしくお願ひします」

多分、前に私が半分冗談で書いた名前の件についてかと思われます。

放課後、取り巻きの男子達と話をしながら帰りの支度をしていた小百合は坂田が頭を抱えて唸つてゐるのに気が付いた。前に説教やら何やらあつたが話しておけば何か得な事があるかも知れないと興味半分で話しかけた。

「坂田さん、どうしたの？」

坂田が顔をあげる。瞬間顔が少し引き攣つた。ちよつとの沈黙の後にやっと坂田は口を開いた。

「椿…さんは料理は作れる？」

あからさまに後からさんを付けたのが氣に食わなくて少し苛立つたがすぐに冷静になり、なんでそんなことを聞くのか考へる。結局答えが出なかつたので質問に答える事にした。

「作れるよ。でもそれがどうかしたの？」

逆に質問で返してみたら今度は坂田が考え込みしづらくなってしまった。

「何でもない。ちよつと聞いてみたかっただけだから」

とだけ言つてそのまま鞄を持って教室から出て行ってしまった。

その発言に更に苛立ちを感じながら近くにいた男子達に坂田が何故

あんなことを聞いたのか訊ねる。

すると一人の男子がさも当たり前のようになに坂田が料理下手だということを教えてくれた。

今まで欠点が見えなかつた坂田の弱点が見つかつた。まさかそれが料理だとは思いもしなかつたがこれでひとまず一步前進出来た。

今日は一人で帰ると男子達に別れを告げ教室から出ると3・2から「女のくせにとか言うな！！」という坂田の声が聞こえてきた。成る程、情報は事実のようだ。

さて、どうやつて坂田を出し抜き大和を落とそうかと考えてこの前大量に持つてこられた餡を思い出した。確かに食べたいとは言つたがそんなに持つてくるか、と仰天したものだ。

あのあと食べきれずに余つたものがまだあるはずと思い、その餡で何を作ろうかと小百合は考えながら下校して行つた。

大和は調理準備室の棚や冷蔵庫を漁り、クッキーを作る為に必要な材料を確認していた。

「……うん、一通りあるな。あ、バターは出しておこう。あと卵も……。で、飾り付け……」

大和は引き出しを開け、中にあったココアパウダーとチョコチップを取り出した。

「……どっちを使おうかな。ココアクッキーを作つて、プレーンクッキーにチョコチップを混ぜるのも良いかもしれない」

「ココアパウダーをチョコチップを持って考え込む大和。そんなとき、調理準備室の扉が開かれ、部員である青山あおやまが入ってきた。

「部長ー、坂田先輩來たッスよ」

「あ、もう來たのか？わかつた、今行く」

悩んだ末、大和は両方を持って準備室を出た。

準備室から出ると、バターを不思議そうにつづいていた美穂が大和を見た。

「どうしてバターと卵だけ出てるの？」

「バターと卵は最初に室温に戻しておいたほうがやりやすいからな。それかバターは湯煎するか」

「……？」

室温も湯煎もわからないのだろうか。それともバターと卵を温める意味か。いや、両方かもしれない。想像以上の美穂の無知さに大和は愕然とした。

「あと、この粉なに？」

「重曹とかが入ってるやつだ。……今日来たのはお前だけか？」

「うん。部長も来たがってたけど、置いてきた」

「なるほど、さっきからドアを壊れそなくらい叩いているのはあいつか」

青山か松島、それとも一階堂か美穂が鍵を閉めたのだろうか。二階堂がその必死過ぎる打撃に恐怖で顔色を悪くしていた。なんにせよ、その素晴らしい判断に大和は拍手を送りたくなった。

「青山！ 愛してる！」

「え！？」 なんで！？ じゃあとりあえず俺も愛してるシス部長！」「

「あれ？ 松島愛してるぞ！」

「いつから部長お
愛してますー！」

「じゃあ、先生愛します！」

「じゃあいいんだ。まあ、俺も廻らせておこう。これなりだ

二二四

大和の感謝の愛の告白に各自何処か見当違ひな答えと愛を返した。
どうやら三人は鍵を閉めていないらしい。だとすれば、

「……あつ、美穂！ 愛してる！」

「なに? 私はおもげ的な?」

美穂は大和の言葉に少し嫌そうな顔で返した。しかし、その頬は淡く色づいている。大和が気付くはずもないが。

自分を救つた救世主に感謝の意を示して満足した大和は、拳を突き上げて言つた。

「……よし、早速クッキーを作るぞ！」

「『おー！』

「おー」

「おー……おー……」

大和の言葉に青山と松島がやる気に漲つた返事をした。遅れて二
みなぎ

階堂がやる気の無なそうな声で、美穂は羞恥からか小さな声で言つた。

「えーと、じゃあ俺と先生がまずはお手本を見せるから、美穂は青山と松島に手伝つてもらしながら後に続いてくれ」

大和が言つと、横でふにふにしてきたバターをつついでいた一階堂が嫌そつな顔をした。

「ええつ。俺もやるのかよ。先生クッキーだけもらおうと思つてたのに」

「働くがざる者生きてべからず！」
「重いな」

此処で大和の手伝いをしなかつたら、いつたい自分はどうなるのだろう。一階堂は少しそつとした。

一階堂のそんな様子には全く気付かずに、大和は青山たちを見た。

「じゃあ、青山、松島、頼んだぞ。美穂は料理が苦手だから」

「はいっス！ 坂田先輩、よろしくお願ひします」

「うん、よろしく」

「それにも坂田先輩つて本当に料理出来ないんスね！ だつさ！」

「料理は女の嗜みなのに出来ないんですねー！ ふふ、だつせー。」「なにこの子たち凄くムカつく

青山たちはによによと馬鹿にしたような笑顔で美穂を見た。美穂はピクリと頬を引き攣らせたが、自分の部の後輩ではないからか、鋭い蹴りが繰り出されることはなかつた。

「……えーと、まずはバターを白くなるまで混ぜます」

対応に困つた大和は結局そのまま調理の説明をすることにした。大和の説明に美穂がきょとんとした顔を見せる。

「白くなるまで？」
「白くなるまで」

大和は頷く。益々不可解だといった顔で美穂は更に訊ねた。

「バターって、黄色いのに白くなるの？」
「…………。とりあえず見ててくれ。先生頼んだ！」
「俺か」

一階堂はスースの裾を捲り、泡立て器を持ち、バターを素早く搔き混ぜた。みるみるうちにバターは白くなり、一階堂はそれにグラウンシュガーとグラニュー糖を加えた。

「あ、今、先生が入れたのはブラウンシュガーとグラニーコー糖な。名前くらいは聞いたことがあるだろ?」

「うん、一応」

「これすらわかんなかったら女捨ててますよねー」

「そろそろ蹴つても良いよね」

一々茶々を入れてくる青山たちに美穂の堪忍袋の緒はもう限界だつた。些細なことでもはち切れる。美穂はそんな可笑しな確信を持った。

「こりこり、仲良くしてくれ。あと、暴れると埃がたつからやめろよ? 蹴るのは後でだ」

「ええっ! 部長! 可愛い後輩を見捨てるんスか!」

「先生からもなんとか言って下さいよー! 可愛い部員からのお願い!」

「可愛い……? 増たらしい後輩なら其処に三人もいるんだがな」

「ブルータス! お前もか!」

いつもこんなくだらないことをしているから、調理時間が遅れるということに大和は今気が付いた。大和は話している間もずっと動いていた二階堂の手元を覗き込んだ。

「あ、出来てるな。先生、もう良いぞ」
「ん、あー、手が疲れた」

一階堂はボウルを大和に手渡し、手を少し振った。大和はボウルを美穂たちに見せた。

「こんな感じに跡が残るようになるまでふわふわに泡立ててくれ

「……努力はする」

「結果を残してな」

美穂はぐつと泡立て器を握ると勢いよく泡を始めた。

「美穂、飛び散つてゐる」

「坂田、素早く搔き混ぜると力一杯搔き混ぜるのは先生なんか違う気がする」

「仕方ないッスねー。俺がやるんで次の工程は先輩やって下さいよ？」

青山はそう言つと美穂からボウルを受け取り、軽々とバターを泡立て、ブランシュガーラを加えた。美穂は女として敗北感を感じた。

リベンジだと言わんばかりに美穂は搔き混ぜ始めた。

「美穂、飛び散つてゐる」

「坂田、だから違う」

「仕方ないです。私がやるから先輩はもうやめて下さ」。その

うち中身なくなりますよー？」

松島はそう言つて美穂からボウルを奪い取つた。美穂は自分と青山たちと何が違うのかを真剣に考え始めた。

「……うん、一応出来たみたいだし、先に進むな。次は、溶いておいた卵を二回にわけて入れて、よく馴染ませるんだ」
「どうしてわざわざわかるの？ どうせ全部入れるのに」
「少しづつ加えるとバターとよく混ざつて分離しにくくなるんだ」

話しながら大和は予め用意してあつた卵を加えて混ぜた。ほう、と美穂は感心したように頷いた。部長なだけはある。
美穂も見よう見まねで混ぜてみるた。さすがにこれは出来なければ女以前に知恵を持つた人間としてまずい。

「ん、出来たな。次はふるつておいた薄力粉、重曹、アーモンドパウダーを二回にわけて入れて混ぜてくれ。あ、ゴムべらでな」

一階堂は大和の説明と同時進行で作業を進めた。その手慣れた手つきに美穂の目は釘付けだ。

「……これ、どう混ぜてるんですか？」
「ゴムべらを縦に入れて、底からすくつて、切るよじこじして混ぜる」

美穂の問いに一階堂は淡々と答えた。よくわかつていなさそな
美穂に、大和がフォローを入れた。

「まあ、混ぜ方なんて気にしなくても大丈夫だ。混ざつてさえいれ
ばだいたい出来るから」

「……頑張る」

美穂はぎこちない動作で生地を混ぜた。今にも生地がボウルから
飛び出そうだ。

「……じゃあ、次は「コアパウダーを入れてくれ。こつちはチョコ
チップを入れるから。さっくり混ぜるんだぞ」

「そ、さっくり……？」

大和は横目で美穂の手元を見ながらボウルの中身を混ぜる。こい
つは相変わらず本当に不器用な奴だ、と思つた。

「、よし、混ざったな。じゃあ、この生地を一時間寝かせ、「

「一時間！？」

「「たものが此方でーす！」」

「ええ！？」

「料理番組かよ」

青山と松島が調理室のほうの冷蔵庫の中からボウルを取り出し、

今まで大和たちが手にしていたボウルを冷蔵庫に入れた。

悪戯大成功、と大和たちはハイタッチをした。二階堂は呆れてい
る。

「これはなんにも入っていないプレーンクッキーの生地だから、適
当に型をとつて、あとは焼くだけだ」

美穂にクッキーの型を渡しながら、同時に指示を出した。

二階堂はその様を見ながら大和は将来良い主夫になりそうだと思
つた。

13 謾理部男子（後書き）

いつも以上に文が乱れていますね。台詞が続いているのが多くて読みづらい。

～したものは此方ですーをやりたいがために頑張った。だけじゃすがに全工程載せなくとも良かつた気がする。疲れた。

美穂は一度大和と別れ、下駄箱に向かった。

一緒にそのまま調理室に行つても良かつたのだがどうしても確認したいことがあった。一つの下駄箱の中の靴を確認してから思わずガツツポーズをした。ちょうど通つた後輩に見られ、不審な目で見られた。

私が確認したのは椿の下駄箱だった。今、椿は大和を狙つているから部に来る可能性は否定できない。ましてや今来られては美穂の料理下手がばれては困る。

とにかく美穂は椿が帰つたことを確認すると安心して調理室に向かつた。

……

ガラリと扉を開けて力チャリと鍵をかける。既に調理室のメンツは大和を除いて全員いた。机の上には道具と卵とバターがのつていた。興味半分でバターをつづいていると準備室から大和とその後輩、青山が出てきた。どうやら元々準備室に居た大和を青山が呼びに行つたらしい。

「どうしてバターと卵だけ出てるの？」

「バターと卵は室温に戻しておいたほうがやりやすいからな。それ

かバターは湯煎するか

「……？」

室温、湯煎。はてさてどこか（授業）で聞いたことがあるような。大和はそんな美穂を見てかなり呆れていようつだった。

「あと、この粉なに？」

「重曹とかが入ったやつだ。……今日来たのはお前だけか？」

他に誰か来ると思ったのだろうか。こっちの部員が料理が出来るかは知らないが嗅ぎ付けてきた奴は一人いた。

「うん。部長も来たがってたけど、置いてきた」

「なるほど、さつきからドアを壊れそつなくらい叩いているのはあいつか」

叩いている音の間に開けてよー、と時折聞こえてくる。これじゃあ部長と本多のレベルが同じだ。部長、やる気出さなくとも良いからそこまで落ちぶれないで下わい。一階堂の顔色が悪い。すいません、後で言つときます。

「青山ー・愛してーるー」

「えー? なんでー? ジャ あとりあえず俺も愛してーるッス部長ー!」

「あれ? 松島愛してーるー!」

「いつから部長はそんな軽い人になつたんですかー。でも私も部長のことが愛しますー！」

「じゃあ、先生愛しています！」

「じゃあってなんだ。はい、俺も變しますよ。これなりどうした」

まさかの告白タイムにちょっとポカンとなる。……これがこの部の普通なのだろうか。見ていてコントのようだ。いつも放課後は時間があるから上手くやれば沢山作れるはずなのだが、成る程これでは作れそうにない。

「……あつ、美穂！愛してる！」

「なに？私はおまけ的な？」

明らかに後から思い出したように言われたので嫌悪感を言葉に含ませた。は、やはり言葉的には嬉しい。美穂は顔が少し熱くなるのを感じた。

「……よし、早速クッキーを作るぞ！」

卷之三

一〇一

大和が拳を上げると青山と松島が元気よく返事をし、一階堂がびつでもいいと言いつよく返事をする。

「お、……おー……」

美穂は恥ずかしくて小さな返事をした。顔が更に熱くなるのを感じた。

.....

型抜きをただ黙々とする。それから後は思い出したくないくらい酷かつた。青山と松島には散々馬鹿にされたし、大和と一階堂からは駄目だしされ、もう疲れた。

「はあ……」

思いだした。小さい頃少し料理の手伝いをしていたが、あまりにも危なっかしいのでドクターストップならぬマザーストップを受けたのだった。

私だって料理は作りたいが止めろと言われたからには無理には出来なかつた。そして今に至るといつ状況だ。

「どうした？」

「ひやあつー？」

「うわつー？」

不意に現れた大和に驚き思わず情けない声を上げてしまった。その声に驚いたのか大和も驚き声をあげた。

「あ……、『めん』

「いや……、で、どうしたんだ？」

「んー、ちょっとへこんでて」

大和はすぐに分かったのか（すぐに分かっても困るのだが）、料理のことか、と言った。間違いでは無いのでとりあえず頷いた。大和は考え込んで、

「心を込めればいいんじゃないかな」

と言った。

心を込める?と聞き返すと「うん」と頷き返した。

「下手でも、心を込めればまた違つてくるんじゃないかな」

心を込める……、小ちく反復する。なんだか自分で何か拭拭されていく気がした。ありがとう、とそれだけ言つと私はまた黙々と作業を始めた。

14 パソコン部女子（後書き）

「うつ、相変わらず上達しない。」

翌日、朝から大和は菓子を貪っていた。珍しく洋菓子である。

「お、なにそれ。クッキー？」

「クッキー」

目敏くそれを見つけた宮城が大和に近寄る。

大和が持っていた菓子はクッキー。昨日、部員たち、それと美穂と一緒に作ったクッキーである。

本当は昨日のうちに全て食べてしまおうかとも思った大和だったが、夕飯前に菓子をあまりばくばく吃べるのはいけないと残していったのだつた。変なところで大和は眞面目だ。

ちなみにプレーンクッキーのほうは調理部スタッフとパソコン部たちが美味しくいただきました。

「へー、俺にもちょーだい。これチョコチップ? 美味そう」

「良いよ」

快くクッキーを分け与える大和。宮城は嬉しそうな顔でクッキーを口に入れた。

「おー、美味しい。やっぱお前料理上手だよなあ。」Jリーダーも食つて良い?」

「……別に良いけど、」

よつしゃ、と小さく呟いて宮城が一つまんだのは、美穂たちが担当していたココアクッキー。大和は少し心配そうな顔で宮城を見た。

「え、堅^{かた}つ」

バキ、というクッキーにあるまじき擬音が聞こえた。大和が悪いわけではないのに、大和はなんだかとても申し訳ない気持ちになつた。

「なにこれ。堅焼き煎餅？ クッキーと堅焼き煎餅ってどういう組み合わせだよ。やっぱお前、変わってる……、え、ココアの味がしきた。なにこれ怖い」

「それ、美穂が作ったココアクッキーなんだ」

「クッキー？ 嘘だろ?」

大和が作ったクッキーと材料は同じだるひに、何をどうしたら此処まで変わり果てた堅いクッキーを練成出来るのか、宮城には理解出来なかつた。

口の中のクツ キーらしき物体を碎くことは出来たが、堅過ぎて飲み込むに飲み込めない。無理に飲んでしまえば喉を傷付けてしまう。富城は恐怖した。

大和が飲み物を買つてきてやるべきか真剣に悩んでいると、別クラスであるはずの小百合が何故か、此方が遠慮してしまいそうなほど堂々と入ってきた。相変わらずの輝かしい笑顔である。

「大和くん、おはよ」

そして、やはり小百合の目には大和しか映つていらないらしく、大和だけに挨拶をした。隣で危険物に苦しむ富城などアウトオブ眼中である。

「おはよう、椿。どうした？」

「大和くん、和菓子が好きだつて前に言つてたから、お饅頭作つてきてみたの。お近付きの印に。食べてみて？」

「へえ、ありがとう！」

大和の小百合への好感度がちょっとびり回復した。もし、これが恋愛ゲームならば、大和の背景には大量の光と共に薔薇が咲き乱れていただろう。

大和は饅頭一つで眩い笑顔を簡単に見せてくれる安い男である。小百合は大和の笑顔にうつとりとしていた。

「あ、そうだ。じゃあ、俺もお近付きの印に！ クッキー、食べて
も良いぞ」

「わあ、本当？ ありがとう！ わたし、とっても嬉しい！」

小百合は笑顔で大和からのチョコチップのクッキーを受け取り、
ぱくりと食べた。

最高級のクッキーでも食べているかのように、大和の手作りのクッキーを大事に大事に味わっている小百合。そんな小百合を見て、大和はクッキーすら食べられないほど劣悪な環境に置かれているのか、と哀れんだ。相も変わらず大和は鈍い男である。

「美味しい！ 料理上手なんだね。こっちも食べてい！」

「あ……、それは、」

小百合は輝く笑顔のまま美穂が作ったココアクッキーを齧る。瞬間、小百合の笑顔が固まった。

「…………、か、堅焼き煎餅……かな？ 大和くんって、本当に和菓子好きなんだね。…………ココアの味がするなんて、独創的な料理ね」

「…………それ、美穂が作ったココアクッキーなんだ」

「…………嘘でしょう？」

これがクッキーなの？ とでも言いたげな顔で、小百合は歯形がついたクッキーを見つめた。

どうして自分も見ていて、尚且つ青山たちも一緒に作ってくれていたクッキーがこんなことになるのか、大和も不思議だった。

そして、自分の歯の頑丈さに感謝した。味だけを見れば、普通のクッキーなのだから。

気まずい空気になってしまったのを察してか、宮城が言った。

「ところで大和。お前、椿からもらつた饅頭食つてみれば？ ほら、口直し」

「あ……、うん！ 食べて！」

「……じゃあ、」

いただきます、と大和は饅頭を一つ口に放り込んだ。黒糖の香りと餡の滑らかな舌触りが口の中に広がる。大和は饅頭を飲み込んでから口を開いた。

「黒糖の匂いが、凄いな。結構入れただろう」

「あ、うん。中の餡が甘さ控えめだったみたいだから、量を増やしてみたの。……どう？」

「美味しい！ 僕、こりこり味、好きだ！」

「良かつたあ！」

不安げに曇っていた小百合の顔が一瞬にしてパアッと輝いた。

美味しい、美味しいと饅頭を頬張る大和。そして、それを恍惚の表情で見つめる小百合。宮城は、これで小百合の性格が良かつたら良いのに、と思った。小百合は色々勿体無い女である。

「そりいえば思つたんだけど、椿つて何気に料理出来るんだな」

富城が意外そつな顔で言つ。小百合は当然、と頷いた。

「だつて、女の子ならこれくらい出来て当たり前でしょう。それに、練習したもの」

「ああ、本当、勿体無い」

富城の言葉に大和と小百合が首を傾げた。中々氣の合つそつな二人である。

朝から小百合は今までになく気合いが入っていた。いつもより早く起きて、身嗜みを整え、可笑しなところがないかを入念にチェックしてから家を出た。学校に着くまでも何度も手鏡を見ては乱れたところはないかを確認した。

とにかく、気合いが入っていた。それも全て、大和の為だった。今日だけは女も男も誰も気にならない。いや、大和のことしか考えられなかつた、というほうが正しいのかもしない。

朝のホームルームが終わると、小百合は皆の怪訝そうな視線を無視し、昨日のうちに作つておいた饅頭を持ち、教室を出た。

いた、大和くん。小百合は内心でそつと呴いて、完璧な笑顔を装備した。

家で何度も鏡を見て笑顔の練習をしていた小百合。今の自分は、世界一可愛い。そう自己暗示をかけ、小百合は大和に歩み寄つた。

「大和くん、おはよー」

大和は小百合の存在に気が付くと何かに向けていた視線を小百合

のまつに遣り、にっこりと笑い、挨拶をしてくれた。おはよつ、椿、と。そんな些細なことでも、小百合の心はときめいてしまつ。

「どうした？」

何用かと問う大和に、小百合は本来の用事を思い出し、浮かれる心を叱咤した。緊張のしすぎてどきどきと五月蠅い心臓を無視して、手が震えていいかを確かめてから、小百合は饅頭を持っていた手を大和に差し出した。

「大和、くん、和菓子が好きって前に言つてたから、お饅頭作つてきてみたの」

小百合は混乱しかけている頭で考えた。どうしよう、何も可笑しなことは言つていいくと思う。だけど、心配だった。

待て、これでは自分が大和に行 behaviourを持つていうことが丸わかりだらうか。別に、それでも良いが、いや、やっぱり良くない。恥ずかしい。

小百合は苦し紛れの一言を後から付け足した。

「お近付きの印に。食べてみて？」

大して与えられる印象が変わりはしないことに、小百合は一瞬で気が付いた。

しかし、大和はパッと顔を輝かせて言つた。

「へえ、ありがとう！」

（ああっ！　眩しい！）

小百合は危うく倒れ込むところであった。それほど、大和の笑顔は破壊力があった。

小百合の目に映る大和の背景には、大量の光と共に薔薇が咲き乱れていた。小百合の乙女フィルターは、（少なくとも小百合にとっては）素晴らしい効力を發揮していた。

思わず恍惚のため息を吐くと、今度は大和がクッキーを差し出した。小百合は迷わず受け取り、食べる。優しい甘さが身体中に沁み渡るようだった。

「美味しい！　料理上手なんだね。こっちも食べていい？」

大和が何かを言いかけていたが、小百合はそれに気付かないふりをしてクッキーを齧つた。

さつきまで幸せに浸り切っていた頭は一気に混乱した。見た目を裏切る硬度を持つたそれは、どうやらクッキーではなく、堅焼き煎餅だつたらしい。

フォローが出来ない。これはさすがに美味しいだなんて言えない。

小百合は当たり障りの無い言葉を吐き出した。

すると、大和が一言。

「……それ、美穂が作ったココアクッキーなんだ」「……嘘でしょ？？」

こんなものをクッキーと呼ぶには、おこがましすぎる、と小百合は思った。しかも、坂田が作ったものだったとは。

坂田自身に小百合を陥れようという意図はなかつただろうが、小百合はまんまとしてやられた氣分だつた。

それにも、と小百合は堅焼き煎餅を見た。

よくもまあこんな物体を生成出来たものだ、と思う。料理が出来ないとは聞いていたが、まさかこれほどまでとは。坂田は女として色々失格なのではなかろうか。

小百合が哀れむような複雑な心境を抱いていると、不意に宮城が言った。

「ところで大和。お前、椿からもつた饅頭食つてみれば？ ほら、口直し」

よく言った。小百合は宮城を力一杯褒めちぎりたかった。たまには阿呆も自分の役に立つようだ。

そう、今こそ、坂田と自分の魅力の差を大和に見せ付けるのだ。

小百合は期待と不安が入り雜じつた眼差しで大和を見つめた。ゆっくりと大和の口に饅頭が運ばれていく。やがてそれは咀嚼され、飲み込まれた。大和が口を開く。

「黒糖の匂いが、凄いな。結構入れただろ？」

さすがに気付くか、と思いながらも小百合は緩む頬を隠せなかつた。こんな細かいところまで気が付くなんて、なんだか嬉しい。

「中の餡が甘さ控えめだったみだから、量を増やしてみたの。…どう？」

「美味しい！俺、こういう味、好きだ」

わたしも（饅頭じゃなくてあなたが）好き！と叫びたい気持ちをぐっと堪えて、何も言わず、満面の笑みを見せた。

小百合の大和の好感度を上げようという作戦は、かくして大成功に終わったのであった。

小百合視点 6（後書き）

私の書く小百合は大和と一対一のときのみ乙女になるようです。

美穂はものすごく落ち込んでいた。手元には昨日自分が作ったクッキーがある。原因は他でもないこのクッキーだった。

昨日、美穂は帰つてから初めてちゃんとした形に出来たクッキーを感動しながら食べた　　はずだつた。食べれなかつた。なんとか噛み碎くことは出来たが、なんとも後味が悪い。

(これは、本当にクッキー？)

見た目はクッキー、中身はよく分からぬるもの。何なんだ、これは。おかしい、今回はちゃんと手順も合つていたし、材料の分量も間違えていない。青山と松島にも手伝つてもらつたのだ。間違えるわけがない。

……あれか？あのサックリつてところか？いや、あれはココアを入れるところだ、違うに決まつている。

そんなことを悶々と考えていたら頭が痛くなってきた。結局クッキーは放置した。

結局クッキーは食べれないので仕方ないから誰かに押し付けてしまおうかとほんと投げやり状態になっていた。

美味しそうなクッキーを一つまんで口に放り込めば途端にガキリ、と嫌な音。どこを間違えたんだ、と必死に考えていると後ろから突然声をかけられた。

「珍しく、元気がないな！？」

「？！？」

近くで、それも大声で声をかけてきた。私は奇声しか口にできなかつた。まあ、こんなことを出来る奴は少なくとも私の知っている中では一人しか存在しない。

「……本多、つるさい」

「おお！それはクッキーか！？」

無視。まさか無視されるとは思わなかつた。ちょっとの間思考停止になり、すぐに回路復活。クッキーについて聞かれたという事を理解し終わると言葉を探す。

「ただけど？」

「ふむ、貰うぞ！」

「つな」

いきなりひょいと手を伸ばしクッキーを口に放り込んだ。あつとう間の出来事だったので制止することも出来なかつた。ああ、どうしようか、と頭を抱え込む。

「ぬう！ 美味だ！」

「……はい？」

「中々の味だ！ 坂田が作つたのか？」

あのクッキーをまるで最初から普通のクッキーをだつたかの様にバリバリと噉み砕いている。私個人としてはサクサクが良かつたのだが。

「そうだよ…。 ていうか美味しいの？」

「先程からそう言つておる」

平然と言つてのけた。野球部キャプテンは一味も二味も違うんだな。そのあともばくばくと食べていたので最終的に全部あげた。こっちも処理に困つていたからちょうど良い。

しかし、まさか美味しいと言われるとは思つていなかつた。相手は本多だが美味しいと言われて嬉しくない人はいないと思つ。

心を込めればいいんじゃないいか

不意に大和の言葉を思い出す。そうだね、本当にその通りだ。作れば分かつてくれる人は必ずいる。さつきの落ち込み具合から打つて変わって少しハッピーな気持ちになりながら今度何か挑戦してみようかと思つた美穂だつた。

16 パソコン部女子（後書き）

浅知恵を絞りすぎたせいから馬鹿に近付いた気がしてならない。
これからもこんな私の小説を見てくれれば幸です。

放課後。暖かな夕陽が窓から射し込む頃。大和と夏輝は何故か生徒会室で菖蒲を巻き込んで、文化祭の話し合いをしていた。

学校の地図を机上に広げながら必死に説明をする菖蒲。そんな菖蒲の顔を一心に見つめている夏輝と、頬杖をつきながら聞き流すよう話を聞いている大和。菖蒲の苦労は計り知れない。

大和はお茶請けのせんべいに手を伸ばした。が、何も無い。既に夏輝によって食い尽くされていたようだ。見境無しか。仕方なしにお茶を飲んだ。

「そ、それで、パソコン部と調理部合同の出し物は此処でやる」とに決まつたんだけど……」

菖蒲は説明をしながら、おどおどと夏輝と大和の顔色を窺つている。自信なさげに、声はだんだんフェードアウトしていった。

菖蒲の白い指が示す箇所を見つめながら、大和が言う。

「ふうん、校門付近か。やりやすいのかやりづらいのか、微妙なところだな」「い、ごめんなさい……」

大和の言葉に菖蒲は目を伏せた。細い肩を強張らせて、大和の視線から逃げるよう身体を小さくしている。すると、夏輝がムツとした顔で菖蒲のフォローに入った。

「良いじゃん。来た人間、皆の目に触れるんだから、やりやすいに決まってるだろー？」

「別に嫌だとは言つてないだろ？」「

勘違いをさせたなら、悪かつたな、と大和が小さく言つた。表情は気まずげだ。菖蒲は慌てて首を横に振つた。その様を見て、夏輝は満足気に笑んだ。

「それに、何処でも良いつて言つたのはあたしたちだ。文句なんて言えないし」

「おい、それは聞いてない」

サッと表情を変えた大和。それを一瞬で察知した夏輝が菖蒲の背に隠れようとするも、時すでに遅し。がしつと頭を掴まれ、アイアングローブお見舞いされた。場所取りという重要な案件を、何をお前の独断で決めてくれているのだと。

頭が割れてしまうのではないかと思うほど痛みに必死にもがく夏輝だったが、その抵抗も空しく、結局夏輝が謝るまで大和の手が離されることはないなかつた。

大和と夏輝が落ち着いたところで、菖蒲が切り出した。

「……それで、部活の出し物は部活の予算になつかうんだけど、余裕はある？」

暫し考え込む一人。先に口を開いたのは大和だった。

「……これからまたいくつか調理実習を控えていることだし、あまり使いたくないな。パソコン部のほうにはいくらくらい部費がいつているんだ?」

その質問を受けて、菖蒲は本棚の中からあるファイルを取り出し、ページをぱらぱらと捲つた。どうやら、菖蒲が取り出したファイルは各部の詳細が書かれた書類をまとめたものようだ。

「ええと……、インク代とかコピー用紙のぶんで四万五千。人数が文化部のわりに結構いるみたいだから、そのぶん上乗せで五千」

「五万か。中々だな」

答えを聞いて、大和はふむ、と少しの嫉妬も混ぜて頷いた。自分の部活よりも一万多い、と。

「でもインクも用紙もそこませすぐに消費しないだろう? いくら残ってるんだ」

「えーと……、ほとんど残っていないんだな、これが」

「なんで!?

夏輝は誤魔化すような笑みを浮かべて、頬を搔いている。大和の頭には、一瞬、最悪な展開が過った。

よもやこの女、部費を部に関係の無いことで使い込んだではないだろうな。

半ば祈るよつて夏輝を見つめると、夏輝はぼそりと言つた。

「お茶と、お茶請けのお菓子を、」

「そのなけなしのものも削られたいのかまな板」

悉く（嫌な）想像通りの行動しかしない夏輝にはほとほと呆れ果てる。大和は表情を引き攣らせながら、夏輝に渾身の蹴りをお見舞いした。

「ぬおおおお……！」

夏輝は頭を押されて蹲つている。そんな夏輝に慌てて駆け寄る菖蒲。大和は痛む足を擦つてお茶のおかわりを入れた。荒み始めた心が少し落ち着いた。

「……まあ、済んだことはもう仕方ない」

「さすが少年！ おっとこまえ～！ 菖蒲は可愛いー！」

「つえ……！ あ、ありがと～……」

何故こいつらは隙あらばいちゃつとするのか。大和は少し冷めた目で一人のやり取りを眺めていた。

ふと、大和が窓の外に目をやると、かなり日が暮れてきていた。もう電気をつけていなければ作業が滞ってしまうような時刻だろう。話はもう終わっている。解散を告げようとした大和に、夏輝がさつきまでとは違う真剣な目で大和に言った。

「少年、きみって最近、あの女と仲が良いんだってな」「椿のことか？……まあ、友人だからな」

それがなんだ、と大和は夏輝を見遣る、菖蒲は少しだけ顔色を変えた。夏輝は何も言わず俯いていたが、すぐに顔を上げた。

「きみ、落とされんなよ
「落とされ……？」
「……意味がわからないなら、それで良いわ」

訳がわからないと顔を歪めた大和に、菖蒲が囁くようにそつと言う。

その言葉の意味がわからなければ、お前たちが危惧していることの回避もしようがないだろう。大和は声に出さず、心の内で思った。

「もう田舎い奴は落とされてる。あたしら女がひとつではや、それが最後の皆みたいなもんなんだ」

「とり、で?」

「……私たちね、この学校を守りたいの。これ以上、崩れないよう

に

神妙な顔で菖蒲が呟いた。夏輝は眉を寄せながら言つ。これ以上は、抑えきれないのだ、と。

相変わらず大和には理解出来ない言葉だったが、この学校にとつて、何か良くないことが起きようとしているということだけは、わかつた。

「あたし、あの雌豚は嫌いだけどな、あいつは悪くねえって知ってるから」

「……この学校は、勝手に崩れたのよ」

菖蒲の最後の言葉が、自棄に大和の耳についた。

17 調理部男子（後書き）

部の予算の振り分け、文化祭については適當です。想像上のもので
すので、あまり突っ込まないでいただけないと嬉しいです。

カタカタとキー ボードを叩く音が静かなパソコン室に響く。今日は私と男子部員一人しか部活に来ていなかつた。よりもよつてなんでこいつら、と嘆いたが今日は割と大人しい。実は二人には寄せのためにポスターを造つてもらつていた。部活のスターくらい造つてもらおうと思ったのだがほとんどが逃げ帰り、最終的に残つていた二人に強制的にやらせることにした。

「わか、 らないっ！！」

「お、 落ち着け！」

「はあ……」

滝下は部長 LOVIE になるまでは一応真面目だつたよつだ。今は本田の役割を担つてくれている。なんとも有難いことだ。

部長は会議に行つてくるとか言つてさつさと出て行つてしまつた。この様子では恐らく今日はもう顔は出さないだろう。

突然、何を感じとつたか二人の動きがほぼ同時に止まつた。二人はそのままパソコンの置いてある机の下に潜つた。正面から見れば分からぬだろうが横から見れば丸見えだ。

しばらくすると足音が遠くから聞こえてきた。いろんなタイミングで足音が聞こえてきたからまあまあの人数だと思う。近付いてきたがパソコン室には止まらず、進んで行つた。白川と滝下はほつとした顔で机の下から出て來た。

「一体どうしたの?」

「ふ、副部長はあれが分からないと嘆つか

「あれは部長とは比べものにならない椿といつ恐ろしい奴の親衛隊だよ」

びつから逃げ回つてゐるようです。既に親衛隊の被害に遭つている部員がいるのにこいつらまで狙われてたのか……。少し頭が痛くなつた。私にはイケメンとか普通の顔とかよく分からぬけど少なくともこいつらは普通辺りに属するんじゃないか?

まあ、大体の男子は色々な意味で終わつてるからまだマシだ。というか富城も狙われないのでお前らが狙われるつて……。

「副部長、会議終わつたよー」

「ん、お疲れ部長」

珍しく生徒会長を連れずに単独で来た。いつもとせむりやんと仕事をするときだけだ。

戻つて来るのは思わなかつたがまあ良い。確か今日の会議は場所決めがどうとか言つていた気がするから戻つて来る可能性はあつた。発作が始まつた滝下を黙らせてから話に戻つた。

「で、どうなつたの?」

「んー、校門の近く」

随分ザックリと説明してくれました。わかりやすいといえばわかり

やすいんだけど。それにしても校門の近くか。

「場所がなかつたからつていい、つてことはないよね？」

「それはない。菖蒲は仕事をちゃんとやる子だ」

キリッとした真剣な眼差しで言い切った。その真剣さ、是非とも仕事に回していただきたい。部長も生徒会長を見渡すつよ。

「それならいいわ。あとは本番が問題ね」

「その話だけど、副部長大丈夫？」

「ヤニヤしながらこっちを見ている。元々こんなことになつたのはあなたが原因だつていうのに……。軽く睨み返してから溜息をついて男子部員に指示をだす。

「ポスターに場所入れといて」

「えー、あたしは無視？」

「分からんんだが……」

「私が教えるわ、大丈夫よ」

「やつぱり無視？」

面倒になるのは困るので起きかけていた滝下をもう一度氣絶させた。部長は無視しつづけたので諦めたのか帰つて行つた。

パソコン室にはゆっくりと途切れ途切れのキーボードを叩く音が響

いていた。

18 パソコン部女子（後書き）

自分で出しどいて男子の口調があんまり決まっていなかつた。
また分かりにくかつたら「めんなさい。

「……ねえ、」

今は休み時間。学生たちにとつては授業の後舞い降りた女神と言つても過言ではない、貴重な時間である。生徒たちの喧騒が、3-2を支配している。3-2は今時珍しく仲の良いクラスで、皆が冗談を笑顔で交わし合つていた。

そんな和やかな時間を壊すように、ある来訪者がやつてきた。

「お前は……、」

見覚えのあるような、ないような顔だ。大和はそんな曖昧な記憶から思わず呟いた。その言葉を受け、男は笑つた。美しくも、何処か危うい雰囲気が漂う笑顔だった。

「あれ、僕のこと、知っているんですか？ 光栄だなあ」

くすくすと笑う男に、傍にいた宮城が少しだけ嫌そうな顔をした。こういうタイプの人間は何故か好かない、彼は前々から溢していた。

「お前は……、」

もう一度、言つ。男は何を思ったのか、笑みを深めた。

「奥さん？」

「名前に“わん”をつけるんじゃない！ 奥で良いです」

確か、そんな感じの名前だった、よつな気がする。大和はそんな思いから念の為、確認をとつたが、どうやら地雷を踏んでしまったようだ。今にも飛びかかってきそうな鬼気迫る形相で男は怒鳴った。

奥 恵斗。 それが、生徒会副会長である彼の名前である。副会長と言つても、今はろくに仕事もせず、小百合の奴隸と化しているが。ちなみに、敬称をつけると途端に人妻になってしまふ自分の名字がコンプレックスらしい。

それにしても、副会長様がいつたい自分になんの用なのだろうか。大和は首を傾げて、思った。夫は良いのか、ど

「止めて下さい！ 不快です！」

「どうやら声に出してしまつていたようだ。奥は本当に嫌そうな顔をしてくる。

夫というのは、同じ生徒会役員である越戸 義樹のことだ。一人揃つて生徒会の夫婦と呼ばれている。本人たちは不本意だそうだ。越戸の役職は会計である。しかし、奥と同様に仕事を放棄し、遊び歩いている。

奥は微妙な空気を散らすように佇まいを直し、咳払いをした。それだけで場に緊張感が戻つてくる。伊達に、副会長を務めてはいないうだ。さすがのカリスマ性である。

クラスの人間たちは身構えた。万が一のときには、大和を逃がせるように。何故ならば、彼らには奥がどうして大和を訪ねてきたのか、なんとなく見当がついていたからである。

奥は小百合に大層惚れ込んでいる。当の小百合は最近大和に構いつきり。現状の情報を整理すればすぐにわかる、簡単な推理だ。

「僕が此処にきた理由は、勿論わかっていますよね？ わかつてないなんて、言わせないから」

「悪いな、わからない」

言つた。“言わせない”と言われたそばから、なんの躊躇いもなく、大和は言った。少し不穏な空気が流れ始めた教室内で、宮城が冷や汗を垂らした。まずいかもしね。宮城はクラスの人間たちとアイコンタクトをした。

それに気付かず、大和は陽気に笑つている。奥の表情が怒り一色に染め上げられた。

「そうやって天然ぶつて、小百合を誑かしたんですか……！」

「天然？」

意味がわからない、と大和は眉を下げた。そんな些細な行動でさえも気に障るようで、奥は目を吊り上げ、大和に掴みかかった。突然のことに驚いて目を見開く大和に構うことなく、奥は大和に怒鳴りつけた。

「気に食わないんですよ！ 後から出できたくせに、小百合と馴れ馴れしくして！」

「椿？ 椿と俺は友達だぞ？」

何故そこで小百合の名が出てくるのか、大和は訳がわからなかつた。取り敢えず何かを誤解されているのは確かなようなので、訂正を入れておく。自分と小百合は友人なのだと。しかし、奥はそれを鼻で笑い。撥ねつけた。

「はっ、どうだか。口ではいくらでも言えますよ」

意味もわからず、見知らぬ人間に罵倒され続ける。いくら心の広い人間であつても、ほんの少しも苛立たない者がいるだろうか。そんなわけがなかつた。大和は聖人君子では無いのだ。なんの謂れもない暴言を浴びせられたら、当たり前に苛立ちを感じる。

今にも感情のままに喚き散らしてしまいそうな口を抑えて、大和は深呼吸をした。大和は阿呆ではあるが、愚かなわけではない。そんな行動をとつても、事態は収束の方向に向かつていかないことなどわかりきつていた。

「……じゃあ、どうすれば信じるんだ？」

大和が色々な言葉と感情を呑み込んだのを、クラスメイトたちは気付いたらしい。気遣わしげな顔をした。

いや、こんなあからさまに自分を落ち着かせるような行動をしていたら誰でも気付いて当たり前だが、生憎目が濁りきつた奥には気付けなかつたようだ。

大和は自分を心配そうに見ているクラスメイトたちに笑みを返してから奥に向き直つた。気分は魔王の配下の四天王の部下に戦いを挑む勇者である。

周りの様子に奥は気付かず、言った。

「じゃあ、今後一切小百合には近付かないで下さい」

此處で、今まで必死に抑えていた大和の怒りが爆発した。

「友達に近付くなと言われて素直に従つとでも思つたか！ 僕はそんな薄情な人間じゃない！」

「、なんです、やっぱりお前も小百合に当たつたんじゃないか！」

思わず横つ面を殴り飛ばしてしまいそうになる。暴力を振るえ、自分はこいつよりも人間としての程度が下の、畜生に成り下がるのだ。大和はそう必死に言い聞かせ、しかし、奥を睨みつけた。

その余りの眼光の鋭さに、奥は怯んだ。大和はその隙を見逃さず、また怒鳴った。

「だいたい、どうしてお前は人の友好関係をそう歪んだ目でしか見れないんだ！」

「ツ歪んだ目！？ 失礼な！ 僕は事実を述べているだけです！」

「だから、それが歪んでいると言つんだ！」

大和に、小百合に対する恋情など、これっぽっちもない。ありもしない妄想を並べ立て、事実なのだと信じて疑わない。それの何処が歪んでいないのか。

そう言うと奥は返す言葉が見つかなかつたのか、ぐつと黙り込んだ。すると、休み時間終了と授業開始を知らせるチャイムの音。それと同時に次の授業を担当する教師もやってきた。二階堂である。

「……奥？ おい、お前の教室は此処じゃねえぞ。さつさと自分のクラスに戻れ」「……すみません」

奥の存在に気づいた二階堂は氣だるそうな表情で注意をした。本当にやる気の欠片も見えない男である。

「……ああ、それとお前、最近生徒会の仕事サボつてゐらしいな。え？ 成績に響くかんな、覚悟しとけよ」「ツ失礼しました！」

半ば怒鳴るように退室の言葉を口にした奥は早足で3・2を後にした。

先述した通り、大和は聖人君子などと評されるほどの徳を持つてはいない。そして、それはクラスメイトたちにも同様のことが言える。

気に食わない人間など山ほどいるし、その人間が赤つ恥を搔かされれば愉快なことこの上ない。

姿が見えなくなつた途端、耳を劈いた盛大な笑い声に、奥はその端正な顔を忌々しげに歪め、舌を打つた。

この突然の予期せぬ奥の来訪により、大和の存在は“小百合ちゃん親衛隊”に広く知れ渡り、そして、それが一つの大きな波乱を呼ぶのであった。

だるい、すぐだるい。

美穂は知らず知らずの内にウトツトし、ガツンと額を机に強打した。学校では居眠りをするタイプではないのだがさすがに昨日の徹夜はこたえたようだ。幸いにも今は休み時間だ。

美穂は頭をあげるとまたしてもウトウトしだし机に額を強打した。さつきからこれを繰り返している。周りにいる生徒は笑いながらこれを見ているが美穂は気付いていない。

何回かこれを繰り返していると今度は運よく腕に額が押し付けられた。美穂がついに熟睡し始めた時だった。

「気に食わないんですよー後から出てきたくせに、小百合と馴れ馴れしくして!」

この怒声で美穂はようやく目覚めた。小百合と言う所とあの声を聞けば大体誰かは察しがつく。まあ勝手に決め付けてしまうのはあんなので様子を見に行つていた男子に話を聞くことにした。

「……この馬鹿声の発信源は誰

「生徒会副会長の奥さん、だよ。坂田だつて知つてんだろ」

「確認よ」

予想ができてはいたが正直反応じづら。『生徒会副会長の奥さん

”と言うと本当に副会長に妻がいるようだから凄い。

それにしても面倒だ。そこらにいる災ほんだの種なら簡単に蹴つて黙らせることが可能なのだが相手は副会長様様だ、退散するかもしれないがそのあとで私が色々大変だ。いつもいつの間にか面倒事に巻き込まれているのに自分から首を突つ込むなんてごめんだ。

「で、誰が副会長に怒鳴ら、」

「友達に近付くなと言われて素直に従つとでも思つたか！俺はそんな薄情な人間じゃない！」

「、なんです、やつぱりお前も小百合田当てだつたんじゃないか！」

相手が誰かはすぐに判明した。あの声は間違いなく大和だ。きっと大和が言つていることを聞くと大方近付くなと言われたんだろう。大和は友達思いのいいやつだ、昔私があまり人とは話さないタイプだつたのにいつも話に来ていた。

懐かしい、と目を細めるとまたしても怒声が響いた。

「だいたい、どうしてお前は人の友好関係をそう歪んだ目でしか見れないんだ！」

「ツ歪んだ目！？失礼な！僕は事実を述べているだけです！」

「だから、それが歪んでいると言うんだ！」

きっと椿は恋愛対象として大和を見ているだろうが大和はそんな気持ちなど一欠片もないだろう。だが、周りから見れば仲の良いカツブルに見えて仕方なく思える。大和は分け隔てなく接しているか

らその笑顔がそう見せるのだろう。

そういうえば大和はまだ椿のラブコールに気付いていないようだ。しばらくは安全と見ていいだろう。

始業の鐘が鳴つた。これで怒鳴り合いも聞かなくて済むだろう。この時間の授業を担当する釜元かまもとが教室に入ってきた。担当教科は英語だ。

釜元の最初の説教じみた演説を適当に聞き流す。そういうえば文化祭は今週末だったなと思い出し、その日までにもう一度クッキーに挑戦しようと決意した。

20 パソコン部女子（後書き）

番外編を私も書きたいのだが片岡わんの書くスピードが早い。
ペース落してくれても良いよ……。

誰が落とすか。

実は、じつ見えて大和はよく図書室に立ち寄る。そのほとんどが菓子作りの為の資料を借りになのだが、たまに小説を借りていったりもする。偉人伝であつたり、戦記であつたり、その種類は様々だ。

今日は、レシピの本を借りに来ていた。時々手に取り、眺めては元に戻すという動作を繰り返していた大和は、不意に声をかけられた。

「ねえ、広崎くん」

少しだけ驚いて、本を落としそうになる。何事も無かつたかのように大和は声の主を見た。正体は、同じクラスの女子であつた。

何度かテストのヤマを教えてもらつたこともあり、大和は少しだけこの女生徒に好感を持っていた。名前は確か、やまおか山岡さん。教師からも頼りにされる優等生で、テストになると皆の先生役として、引っ張り凧になる。

「なんだ？」

大和は笑顔で用件を訊ねた。山岡はほんのり頬を染めると、すぐ

に気を取り直して言った。

彼女は勉強をしに、此処に来ていたのだろうか。大和はぼんやりそんなことを思っていた。机に勉強道具が広がっていたから、きっとそれで当たりなのだろう。

「広崎くんは、椿のこと好きじゃないんだよね」

「うん……？」

わざわざ自分の勉強を中断してまで訊くことが、それ？大和はなんだか拍子抜けした気分だったが、隠す必要も無いことなので素直に答えた。

「好きだぞ？ 友達だもんな」

大和の言葉に山岡は一瞬だけ息を詰めたが、すぐに安心したように表情を緩めた。そしてくすくすと笑い出す。普段は落ち着いた雰囲気を持つ彼女だが、こういうときは随分年相応だ。

「そう、良かつた。そうだね、広崎くんだから、そうだよね」

いつたい何に対してもこんなにも深く納得されているのか。大和は不思議だった。漸く笑いを収めると、山岡は短く別れの言葉を告げてから自分の勉強に戻った。

なんとなくもやもやした気持ちになりながら、大和はレシピを手

に、図書室を後にした。

大和は菓子作りに関しては一切の妥協を許さず、そして慎重だ。部で菓子を調理する前には、最低でも一度は必ず自分で作つてみる。失敗しない為の予行練習ということもあるが、もう一つ理由がある。それを作るべきか否かを確かめるのである。

そして、味が気に食わなかつたり、青山や松島、一階堂が嫌いそうな味だと思ったときは違うものを作るのである。

突然、作るものを変えたりしても、その作るのは以前調理したことのあるものだけと決めている。

大和は食事は楽しいものであるべきと考えている。嫌いなものを食べて楽しいと感じるわけがない。だから、大和は事前の調査を怠らないのである。

大和はゆっくりと調理室に向かつた。本当は家に帰つて作つても良いのだが、なんとなく調理室で作ろうと思つた。出来たら先生にもわけてやろう。そんなことを思いながら、階段を昇つていく。

今思えば、この選択が最初の間違いだつたのだろう。

調理室につき、鍵を開ける。ドアを開けよつとしたら、何故か開かない。

「……あれ?」

可笑しいな、可笑しいな、と咳きながら何度もガチャガチャやつていると、漸くドアが開いた。どうやら最初から鍵は開いていたようである。なんとなく恥ずかしい思いになりながら、大和は調理室に足を踏み入れた。

最初から鍵が開いていたということは、誰かが此処にいるということだ。放課後にこんなところに来るのは部員の誰かしかいないだろう。もしかしたら一階堂かもしれない。

見知った姿を見つけようと部屋の中を見渡すと、視界の端に栗色を捉えた。

あれは、

「……椿？」

「大和くん」

窓のすぐ傍に、小百合は立っていた。

今まで外を眺めていたのに、大和が来ることをわかつていたのか、全く驚く様子も見せない。ゆつたりと振り返り、うつそりと笑む小百合。

大和は小百合のその笑みに、何故か空恐ろしいものを感じた。そんな気持ちを誤魔化すように、大和は笑顔で話しかけた。

「椿、こんなところで何してるんだ？」

「大和くんに、用があつて」

「俺に？」

そう、と小百合は深く頷いた。

この違和感は、いつたいなんなのだろうか。小百合に初めて会つたときから感じていた違和感。何か

「ねえ、大和くん」

「つな、なんだ？」

思考の海に突然割つて入つた異物。一気に引き上げられた大和は小百合を見た。

いつの間にか小百合は大和の傍まで来ていた。そつと頬に手を当てられ、思わずひくりと頬が引き攣つた。

「大和くんは、わたしのこと、好きなんだよね」

大和の顔を覗き込んだ暗い、虚ろな瞳。身の毛がよだつた。

「ねえ、そうでしょう。わたしと恋人になりたいよね
「な、なんで？」

まるでそれが運命で、最初から決まっていたことなのだと、そう言わんばかりに小百合は言う。大和は咄嗟に疑問を口に出してしまつた。

「……だって、大和くん言つてくれたよね。わたしのこと好きだつて」

言つた覚えが無かつた。確かに友達としては好きだが、恋愛対象として小百合を見たことは無かつた。だいたい大和の好みのタイプは素朴な女性だ。小百合では明らかに合つていない。

「恵斗にわたしに近付くなつて言われて嫌だつて言つたんだよね。ねえそудでしよう。ねえわたしのこと好きだよね好きだよね絶対そう」

小百合は虚ろな瞳のまま大和に抱きついた。大和は、思わず小百合を突き飛ばしてしまった。目を見開く小百合。

「な……なん、でえ……？」

じわじわとその大きな瞳に水分が溜まり始めるのを見て、罪悪感が湧きあがる。だけど、そんな酷い気持ちだけで抱き締め返すことなんてしない。二人とも苦しむだけだとわかっている。

「わ、悪い。俺は、違うから」

お前は自分を好いてくれているのかもしれないけど、周りにはお

前を好いていてくれている奴がたくさんいるのかもしけないけど、でも、自分は違う。

大和はそのまま走り去った。やっぱり、菓子は自分の家で作ろう。

自分の後ろ姿をいつまでも見つめる小百合に、気付かないまま。

21 調理部男子（後書き）

ちよつと病んでおましたね。

授業が終わり、のんびりしていたとき、隣のクラスが何故か騒がしかつた。見に行つてみると、奥と大和が言い争いをしている。小百合は愕然とした。

周りにいた野次馬たちは言い争う二人の姿を目に入れてから、早々に退散している。巻き込まれないようにどううか。自分を見ている小百合に気づかず、奥は言った。

「じゃあ、今後一切小百合には近付かないで下さい」

小百合は思わず奥を殺したくなつた。何を余計なことを、大和にいつたいなんて口を利いているのかと。

「紛い物のくせに、びつしてわたしの思い通りにならないの……？」

ぎり、と親指の爪を噛む。口を離すと爪の形は歪んでしまつていった。どうにもならない苛立ちを抱え、眉間に皺を寄せていると、奥の声のすぐ後に聞こえてきた大和の声。その言葉に、小百合は顔を赤らめた。

「友達に近付くなと言われて素直に従つとでも思つたか！　俺はそんな薄情な人間じゃない！」

「、なんです、やっぱりお前も小百合田当てだつたんじゃないか！」

“近付くなと言われて素直に従つとでも思つたか”、なんて。“お前も小百合田当て”だなんて！

小百合は昔から一つのことにしか集中出来ない。何かをやりはじめたらそれ以外目に入らないし、誰かの忠告も聞けない。だから、狂喜している小百合には、大和の友達という言葉も耳に入らなかつた。

小百合は放課後、調理室に来ていた。大和に会うためだ。調理部でもない小百合が、放課後、調理室に用があるから鍵を貸してほしいなどと言うから随分不審に思われたが、なんとか誤魔化した。

それにしても、大和はまだどうか。小百合は待ちきれないといつた面持ちで窓の外を眺めた。待ちきれないと言つても、それが不快だというわけではない。寧ろ、その待つ時間でさえ愛しくて堪らない。

暫く外に視線を遣つていると、ドアが開く音。ああ、來た。

「……椿？」

「大和くん」

大和の呼び掛けに小百合はすぐに応え、振り向いた。大和は少し驚いたような顔をしている。いつもは素敵なのに、そういう顔はとても可愛い。

大和の瞳が怯えを孕んでいたなんて、きっと氣のせい。だって、大和はすぐに笑顔で小百合を見たのだから。

暫くやり取りを交わすと、大和は何かを考え込んでしまった。自分を見てほしくて、小百合は大和に近付き、名前を呼んだ。バツと勢いよく上げられた顔に、そつと手を当てる。ぴくりと大和の表情が動いた。照れなくても、良いのに。

「大和くんは、わたしのこと、好きなんだよね」

小百合には、大和と初めて出会った瞬間からわかっていた。この紛い物の箱庭の中で、大和だけが唯一自分の“本物”になり得る存在なのだと。

だから、連れていつてしまおう。だって、自分たちは両想いなのだから、大和だって喜んでくれるはずだ。確認のため、また言つた。

「ねえ、そうでしょう。わたしと恋人になりたいよね
「な、なんで?」

なんで、だつて。小百合は思わず笑ってしまった。どうやら、小

百合の王子様は随分と照れ屋なようだ。いや、もしかしたら自分の気持ちに鈍感なのかもしれない。

大和の、自分への想いを気付かせてやるうと優しく語りかけた。

「……だって、大和くん言つてくれたよね。わたしのこと好きだつて」

大和の表情に困惑の色が差した。どうして、そんな顔をするのか。やつぱり、鈍感なんだろう。此処まで言つても気付けないなんて。

「恵斗にわたしに近付くなつて言われて嫌だつて言つたよね。ねえそうでしちゃう。ねえわたしのこと好きだよね好きだよねえ絶対そう」

これで漸くわかつただろう。小百合は幸せな気持ちで大和に抱きついた。きっと、大和はこの逞しい腕を自分の背に回してくれる。しかし、小百合を襲つたのはそんな甘い妄想ではなく、軽い衝撃だった。

大和に、突き飛ばされたのだ。

「な……なん、でえ……？」

思わず目を見開いた。どうして、どうしてどうしてどうしてどうして…!

これはもう、鈍感だと照れ屋だと、そんなことでは済まされ

ない。大和は、小百合を抱き締めなければならないのに。どうして自分も小百合のことが好きだと、愛を囁き返さなければならないのに。

「わ、悪い。俺は、違うから」

小百合は、今度こそ大和の言葉に含まれた真意を正しく受け取つた。受け取つて、しまつた。

お前は自分を好いていてくれているのかもしないけど、周りにはお前を好いていてくれている奴がたくさんいるのかも知れないけど、でも、自分は違う。

大和はそのまま走り去つていつてしまつた。

小百合は、信じられない気持ちで大和の背を見つめた。

暫くして、小百合はキッと天を睨み付けて叫んだ。

「ツビういうこと！？ 一人は“本物”に出来るんでしょう！？
なら！ 早く“本物”にして！ 大和くんをわたしの王子様にして
よー！」

何を言つてゐるのか。もしも此処に小百合以外の人物がいるのだとしたら、きっとこう思ったことだろう。

しかし、小百合以外誰もいなはずの調理室に、機械のような無機質な声が響いた。

“攻略対象に入つていません。キャラクターを選び直して下さい”

「なんですよ……ツー！」

こんなにも自分は大和を愛しているといつに結ばれることも許されないのか。まるで、悲劇のようだ。

小百合は唇を噛み締め、携帯電話を耳に当てた。

もう良い。手に入らないなら壊すまで。ぐちゃぐちゃに壊れてしまつて、そして手を差し伸べてやるのだ。そうすれば、きっと大和は自分だけを見る。

「もしもし、義樹」

ワンコールで出た相手。前までは愉快で堪らなかつたのに、今は煩わしいだけだった。

「広崎 大和くんのこと、虜めてくれる？」

そう言つたときの小百合の笑顔は妖しく、まるで人間を惑わす悪魔のようだった。

小百合視點 7（後書き）

11月23日

昔、唐の国に玄宗げんそうと言つ皇帝こうりょうがいました。玄宗は朝廷の帝位を巡る争いを収め即位した六代目ろくだいめの皇帝でした。玄宗は優れた政治を行い、世を正してきました。

ある日のことです。玄宗は息子の寿王じゅおうの后ご、楊玉環ようぎょくかんに一日惱れをし、取り上げて自分のものにしてしまいました。このとき玄宗は楊玉環ようぎょくかんを貴妃の位につかせ、楊貴妃と呼ばれるようになりました。それ以来、楊貴妃を溺愛なぐさわしている玄宗は政治に关心がなくなり世は荒れていました。

しばらくして朝廷では楊貴妃の一族じゆうが力を持ちはじめました。その朝廷では楊貴妃のまといとこにある楊國忠ようこくちゆうと楊貴妃に気に入られている安禄山あんろくざんが敵対してきました。

それから時が経ち、楊國忠は政治を動かす立場の宰相さいしょうになりました。これを知った安禄山は自分の身に危機を感じ取り、ついに反乱を起こしました。

玄宗は楊貴妃や家臣を連れて都である長安を離れました。しかし安禄山の反乱が楊国忠を打つためと知った兵士達は楊一族じゆうを皆殺しにしました。逃げていた玄宗の楊貴妃の元にも兵士達は押し寄せ楊貴妃は処刑されました。

玄宗は心に大きな傷を受け、皇帝の位を捨てました。このあと、皇太子であつた李享が即位をし、第七皇帝肅宗となりました

.....

「なんだか、呆気ないわね」

美穂はたつた今読み終えた中国の歴史が書かれている本を見た。今いる場所は図書室、元々人気がないので今いるのは私ともう一人だ。私は部活が無いと時々図書室に訪れて歴史の本を読んでいる。ちなみに美穂は日本国民なのに中国の歴史のほうが興味がある。

それにして、と溜息をついて本をじっと見る。あんなに政治に熱心だったのに一人の女で人はここまで変わるのだろうか、と思わず思う。

最初は皇帝を動かし一族に力をつけ、楊貴妃に取り入った安禄山が反乱を起こす……。なんとも漫画のようだ。これが事実化は本なのでよく分からぬが事実だとしたら楊貴妃は凄い人だったのだろう。ふと、休み時間の副会長を思い出した。副会長も前も仕事をしつかりこなしていたはずだ。椿が来てからガラリと変わったとか。やっぱり男は女には弱いのだろうか。だとしたら大和も……いや、今考えるのはやめておこう。

「坂田さん」

「ん？」

誰かに呼ばれたが周りに誰もいないので辺りを見回していると一人の勉強中の女子が顔をあげた。大和のクラスの山岡さんだつた。テスト前に時々一緒に勉強をしたりしている。ちなみに数少ない敬称をつけて呼んでいる一人でもある。

「山岡さん、何？」

「大和くんのこと、好き？」

身体が固まった。なんとも直球な質問だ。しばらく考えてみる。
…結局あまりいい答えは見つからなかつた。

「好き、なのかな…」

「そう、」

それだけで満足したのかまた勉強を再開した。
大和のことが好きか、そんなに考えたことがなかつた。いつも一緒
だったから逆に思いつかなかつた。これはしばらくの間考えてみて
も良いんじゃないかと美穂は思った。

22 パソコン部女子（後書き）

私も中国のほうが好きです。特に水滸伝が良いです。

大和は酷く驚いていた。目を見開き、大きく開かれた口からは掠れた声が漏れていた。誰がどう見ても驚いていた。

大和は下駄箱を開け、中に入っていた生ゴミの姿を認めると、いやいや、そんなものが自分の下駄箱に入っているわけが無いと扉を閉め、しかし漂う異臭は誤魔化しようもなく、また開けると蠅が集つているのを目撃し、いや、まさかこんな古典的な悪戯を自分が受けたわけが無いと扉を開め、でもあれは現実なのかと扉を開け、また一瞬で閉め、次に開けたときにはあの「ミは跡形もなく消えていはばすだと信じて開け、やっぱりあつたように見えたけれどそれはきっと幻覚なのだと自分に言い聞かせ扉を閉め、

「はよ開けてショック受けろやああああ！」

「おおつ！？」

先程まで物陰でほくそ笑み、大和を見ていた人間がついに痺れを切らしたのか、怒声を飛ばしながら勢いよく飛び出した。

大和は驚き、思わず辛うじて上履きの無事だった一部分をつまみ、声の主に思い切り放り投げてしまつた。

これが故意のものではないと言つたら、果たしてあなたは信じてくれるだろうか。

「うわああああッ！？」

「お前、臭いな……」

「俺様の体臭が臭うみたいに言つんじゃねえよ！　てめえのせいだろつが！…」

顔をゆがめ、鼻を押さえ、容赦無い一言を浴びせる。男は涙目で叫んだ。

男の名は越戸 義樹。奥と二人でセットで夫婦の、越戸だ。

越戸がどうしてこんなところにいるのかと言うと、勿論、大和への嫌がらせの為である。元々、こいつは気に食わなかつたけど、今はボコボコにしてやりたい。越戸は大和を睨み付けながら、そんなことを思った。

越戸が大和のことを初めて知った切つ掛けは、年に三回新聞部により発表される校内ランキングだった。

それは、子供らしい、なんてことのないことに順位をつけたものばかりだった。例えば、一番優しい人ランкиングとか、一番恰好良い、美人な人ランキングとか。

いつも同じランキングというわけではなく、いつも「ランキングをつけてほしい」という要望の中からランダムに三つを選んでいるのである。マンネリ化を防ぐためだとか。

あるとき新聞で発表されたランキングは次の三つのものだった。

一番人気者な人ランキング。一番料理が上手な人ランキング（男子篇）。一番笑顔が素敵な人ランキング。

越戸は、幼少の頃から何をやらせてもとても良い成績を残す、所謂神童であった。ルックスや家柄にも恵まれており、少々性格の歪みは否めないが、完璧というものに近い人間だ。

だから、今回のランキングにも自信はあった。いつもランキングで一位に輝くのは自分。勉強面ではたまに奥に抜かれることもある

が、今回はそんな無粋なものは関係のないランキングだ。

だから、余計にショックだった。

そのランキングたちの一一位に輝いていたのは、全て同じ人間。大和だつたのだ。

何故、こんな奴に負けたのか。しかし、全く名前を聞かないと言つたら嘘になる。周りの女たちの間でもよく話題になつていた。

と、まあ、そんなこんなで越戸は大和に敵対心を抱くようになつたのだ。つまるところ逆恨みというやつである。

「お前、奥さんは良いのか？」

「俺様たちを夫婦みてえに言つんじゃねえ！」

下駄箱の生ゴミのことなど無かつたかのように大和は言った。
何故虚めに等しいことをされて、此処まで暢氣でいられるのか。
それは、大和がこれは虚めだということに気が付いていないからである。さすがにこのゴミを仕掛けたのが越戸だということは理解しているが。

それにしても、この生ゴミの設置は越戸の手で行ったのだろうか。
周りには取り巻きがたくさんいるだろうに、わざわざ自分の手を汚すなんて、いじらしい奴である。

越戸は激昂して怒鳴りつけた。怒りで顔が真っ赤で、まるで酔つ払いのようだ。大和はかなり見当違いのことを思つていた。

「チツ……、まあ良い。てめえ、ちょっと俺様に付き合えよ」

大和はその言葉にハツとした。いつぞやクラスメイトたちから
言われた言葉を思い出したからだ。

大和は顔を蒼褪めさせた。その反応に越戸は満足そうに笑む。
う、そういう自分に心底怯えきつた顔が見たかった。

「わ、悪い。俺、そういう趣味ないんだ」

良いから来いと越戸は大和の腕を掴み、引っ張つた。すると、弱々しい、か細い声が。

「越川くん……？」広崎くんも……。何をしているの？」「

声の正体は菖蒲だった。助かつたと言わんばかりに顔を輝かせる大和。そして顔を歪めた越戸。何がなんだかよくわからない状況だが、とりあえず菖蒲は逃げ出したかつた。

「邪魔な奴が来やがつたな……」

ボソリと越戸は呟いた。いくら小さい声とはいえ、周りには人も

おらず、不気味なほどに静まり返っている。菖蒲の耳はその冷たい音をしつかりと拾い取ってしまった。あんまりな物言いに、元々気が小さい菖蒲は思わず萎縮する。

大和は厳しく責めるよつた瞳で越戸をねめつけた。たまたま通りかかつただけの奴に、酷い言い草じゃないか、と。

「まあ良い」

そんな大和の視線に気が付いていたろつこ、越戸はそれを受け流した。

小さく笑い、初めて本当の“恋”というもの教えてくれた女性を思い浮かべる。あいつの為なら、なんだつて出来る。

「広崎、覚えてやがれ。俺様は絶対にめえをこの学校から追い出してやる」

その言葉に、当事者ではない菖蒲が蒼褪めた。

大和は相変わらず何がなんだかわかつていなかつたが、取り敢えず、と思つた。

「職員室に、スリッパを借りに行こ」

まさか靴下のまま生活するわけにも行かない。大和は何故か持っていたゴム手袋を装着し、中に入つていた生ゴミを全て越戸の下駄

箱に詰め直してから職員室に向かつた。

外履きを履いたまま職員室のドアをノックした大和が二階堂にこつ酷く叱られるのは、また別のお話。そして、いつの間にか下駄箱に詰められていた生ゴミを見て、越戸が咽び泣くのも、また別のお話。

23 調理部男子（後書き）

大和は天然で酷い子だと良い。

24 パソコン部女子（前書き）

今回は友人の回ですが、少しだけ前書きをお借りして、片岡です。私のアホスな間違いでサブタイが“調理”部女子になつてました。すみません。

もしかしたら他にもノリでなんか全然違うこと書いてたりするかもしませんので、お気づきになられましたら是非ご一報を。

朝、美穂は本を読んでいた。今日はノルマが全くと言つていい程無かつたのであつという間に終わつたのでだ。ちなみに今読んでいる本は三国志だ。

朝のホームルームまであと10分くらいにある。大体の生徒は来ているのだがその中の男子がほぼ全員いない。この時間になると椿が登校してくる。それを一目見ようと男子は早く登校して校門は人でごつた返すのだ。

「本当、何やつてんだか……」

もう文化祭が間近に迫つてゐるといふのにそんなもの最初から無かつたかのような雰囲気だ。そういうえば今年のクラスの出し物は何になつたんだろう。実行委員は誰だつたけ、と考える。

…思い出して頭が痛くなつた。そうだ、椿だ。確か椿が女子の実行委員だ。そのあとで男子の実行委員が誰だかもめたんだった。結局誰が実行委員になつたかは知らない。

今年の文化祭はいろんな意味で悪いことが多すぎる。文化祭と言えば部外者の大人達や中学生も來たりする。せいぜいグダグダ感が無いような文化祭にしなければならない、と思つた。

遠くからガヤガヤと騒がしい音が近付いてきた。なんでああいう輩はこうも朝から騒げるのだろうか、美穂はいつもそれが不思議で堪らない。

「みんな、おはよつづー！」

椿がいつもと変わらない笑顔を振り撒いて挨拶をした。クラスには女子しかいないのでほとんどが無視を決め込んだ。美穂はとりあえず「おはよう」と軽くようじに言った。

椿はこちらを向いてにこりと笑った。いつも笑顔で疲れないのかと思わず椿に聞きそうになつてそれを飲み込んだ。

「おはよう、坂田さん。何を読んでるの？」

一瞬心臓が止まつた。なんでこっちに興味を持ったのか分からなかつた。こんなことになるなら返事なんてしなけりや良かつたと美穂は後悔した。

「三国志だよ。椿さんも読んでみる？」

向こうが張り付いている笑顔ならこっちだつて、と美穂は変な対抗心を持つて思いつ切りの営業スマイルを顔に張り付けた。椿はちょっと怯んでいた様だつたがまたすぐに笑顔に戻つた。
ちよつとした意地の張り合いだつた。

「ふうん、面白うね。今度わたしも借りようかなあ」

明らかに目が言葉と裏腹に輝いていない。誰がどう見てもお世辞だと分かつたが田が墨つている男子はお世辞だとそれなかつた。だが、もう一人真意が上手く受け取れない人がいた。

「つ、そうだよねー面白いと思うよねー」

「え...?」

美穂と椿は瞬きをした。声の発信源は一人の女性だった。

「音波先生、どうしてここに」

音波先生は理科担当の先生。しかもどこのクラスも担当していないのになんでここにいるのか。

「三国志と言えばやつぱり劉備と張飛と关羽なんだけどやつぱり私はいろんな武将と兵を華麗にまとめあげた孔明が凄いと思うんだよね何が凄いかって言つたら戦地を把握してその場に合つた戦い方をするし敵が何処に逃げるから此処に誰を配置すれば良いとか本当に未来を知つてんじゃないのかつてくらいなんだよねそれで劉備と孔明の出会いがまた良いんだよね劉備が……」

「先、生？」

椿が引いている。思いつきり引いている。この知識量、どんだけ好きなんですか音波先生。というかこれだけの知識あるなら歴史の担当になれば良かつたのに。

結果的に音波先生は朝のホームルームが始まるまで三国志を熱く語ってくれました。

24 パソコン部女子（後書き）

歴史について間違えていることがあつたら指摘お願いします。

登校すれば周りに男子達が集まつて来る。それはいつもと変わらないことでいつもの風景。しかし小百合は今日はあまり興味を持たなかつた。男子に適当に愛想笑いをしてやり、早足で学校に向かう。学校に着けば今度は校門で男子が小百合を待つている。小百合はこれにも興味を持たず、また、適当に返して校舎に入つて行つた。いつもならあの場所でもつと時間を使い触れ合つているのだが、いや、正確には弄んでいるのだが、小百合には今日は何よりも先に確認したいことがあつた。

男子は従えず、なるべく会わないように、会つてもついて来ないよう気をつけながら2・3に向かつた。仲の様子を見てみれば大和は既に登校していた。ただいつもとそれ程変わったことはない。

(義樹は、何をしているの……？！)

義樹は行動力がある。始まるしたら今日、それも朝だと思つていたのだが、大和には精神的ダメージを受けたように見えない。小百合は昨日の出来事を思い出して苦い顔をした。

しかし、義樹が何も行動をしていないと言うのは少しどころかなりおかしい。小百合がもう一度大和を観察すると、上履きではなくスリッパを履いていることに気づいた。どうやら義樹は行動を起こしていたようだ。だが、やはり大和にはダメージはなさそうだ。

(大和くん……、やっぱり、一筋縄じゃいかない)

小百合は改めてそう思い、誰かに加勢してもうおつかと考えた。とりあえず自分で手を汚すこととは、ない。小百合は2・3から離れ、自分の教室へ向かった。

途中で自分を探し回っていた男子を従えてから教室に入つて行つた。

「みんな、おはようっ！」

そう挨拶をしても返事を返す人はいない。でも平氣。別にわたしだつてあなた達の返事なんて求めていない、いらない。だが、この日は少し違つていた。

「おはよう」

小さかつたが確かに返事が聞こえた。わたしに返事をしたのは誰だろうか、とその声の主を探して、ガツカリした。

坂田だつた。なんでおまえが返事をしたんだ。別におまえなんか知らないぞ、とそこまで思つてから小百合は閃いた。

そうだ、大和くんを壊すならまず周りから攻めれば良いんじゃない。将を射んとすれば馬を射よと言つではないか。まず周り、それも大和と特に親しい人達から崩す。そうすれば大和だつて自然に落ちる。小百合は今までに無いような深い笑みを浮かべて、坂田に近付いた。ありがとう、坂田さん。あなたのおかげで良いこと思いついちゃつた。心の中で呴いて。

「おはよう、坂田さん。何を読んでいるの？」

その発言から自分の朝の時間が奪われるのを知らず、……。

小百合視点 8（後書き）

つい先日まで風邪を引いてました。皆さんも風邪には気をつけください。

大和は布団からむくりと身体を起こし、寝起きとは思えない機敏な動きでカーテンを開け放つた。視界に広がる青い空……ではなく、曇り空。しかし、昼頃から晴れてくるはずだから、何も問題はない。

今日は待ちに待った文化祭。多少の不安は残っているが、それは文化祭という一大行事の前では寧ろスペースになる。頑張るぞ、と大和はぐっと拳を握つた。

「ちょっと！ もう景品のお菓子ないんだけど！ 買つておいてって言ったでしょ！？」
「つうるせえな！ そんなに言つなら自分で買つておけば良かつたじゃねえか！」

あちこちから似たような罵声や怒声が聞こえてくる。大和は穴から血に塗れたように見える真っ赤な手を引っこ抜き、隣にいた宮城を見た。宮城も目を瞬かせて釣竿で吊るしていた蒟蒻を引く。二人で何事かと顔を見合わせていると、山岡が。

「いひ、さぼらない」

「あ、山岡さん、」めん

軽く大和と宮城の背を叩く。大和は素直に謝った。すると、山岡は其処まで本氣で怒つてもいなかつたらしい。にこりとして頷いた。宮城も軽く謝罪を入れてから訊ねた。

「山岡さん、なんか周り騒がしいけどさあ、なんかあつたの？」
「うん……、なんだか色んなクラスで揉め事が起きてるみたい」

山岡は眉を下げた。せつかくの文化祭なのにね、と沈んだ声。その悲しそうな顔になんだか大和まで悲しくなつてきてしまった。宮城は顔をしかめ、声を顰めた。

「原因つてさあ……」

「話を聞く限りだと、男子たちがちゃんと自分の仕事をこなしていく
れないみたい」

「やっぱ、椿かあ……」

ふう……、と二人でため息を吐く。大和は不思議そうに目を真ん丸くして一人を見た。そして、注意されたのに自分がちゃんと仕事に戻つていないと気付き、穴の中にまた腕を突っ込んだ。

「ま、ポジティブに考えようぜ。これで今年の優勝はうちのクラス

「……………」

「……………」

山岡は苦笑した。

大和のクラスは、お化け屋敷である。段ボールの壁の向こう側から悲鳴が聞こえた。先程から通り過ぎる足音の多さからして、中々盛況しているようだ。

富城も大和の行動に気付き、蒟蒻をまた揺らす。べчин、と渴いた音がした。どうやら蒟蒻は誰にも当たらず、教室の壁にぶつかつたらしい。大和たちが配置されているのは教室の出入口に一番近い教室脇だ。

唐突に大和が口を開いた。

「……………なんで、椿のせいなんだ？」

「……………、あれ、蒟蒻がねえ」

大和の言葉に富城は怪訝そうな顔をした。手繻り寄せた糸には蒟蒻は無かった。落ちたか、と少しだけ困った顔をした富城が隙間を覗き込んだ瞬間、鈍い音が。

「蒟蒻で転んでるわ。大丈夫かな、あの人」

「なあ、なんでだ？」

「は？ 何が……、ああ」

思わぬハプニングに先程までの話題など吹っ飛んでいた宮城は、大和の唐突な言葉に困惑の表情を見せた。すぐに思い当たったようだが。山岡は客が転んでしまったのを察知すると早足で客のもとへ向かつていつてしまつた。

「……だつて、そうだろ。俺とかは違つけど、今、ほとんどの奴が椿に夢中だろ？ そのせいで、」

「だから、それが可笑しい」

言葉を遮り、何処か冷たい響きを持った大和の言葉に、宮城は少し怯んだが、すぐにムッとした顔をした。宮城は、男子の中では珍しい小百合を嫌つている人間だ。親友とも呼べるほどに親しい大和が小百合を庇うようなことを言つたのが気に食わなかつたのだろう。

「なんで、……何がだよ」

「仮に、そうなのだとして、仕事をしない奴が椿のことが気にかかる集中出来ないのだとして、」

大和は一旦言葉を切り、びしつと宮城を指差した。眼前にいきなり突き出された人差し指に驚いて、思わず宮城は仰け反つた。

「やつぱりそれはそいつらが悪い！」

「だからなんでだつて！」

「だつて、椿は何もしてないじゃないか」

椿は其処にいるだけで、特に仕事をサボれだなんてそんな命令はしてないだろう。なら、勝手に椿に夢中になって、勝手に仕事をサボるあいつらが悪い。そう、大和は言つのだ。自分の言葉が間違っているはずがないと、確固たる自信を持つて。

やつと大和の言葉を理解した富城は、思わず呆れ顔になった。

ああ、つまり、そういう。

この男はどうあっても自分の友人を“悪”にしたくないのだ。そして、その言葉が馬鹿馬鹿しいと笑い飛ばせるような根拠のないものではないから、何も言えなくなる。

「それなのに椿が悪いと言つのは、それは椿に死ねと言つているようなものだ」

別に其処までは思つていない、と言おうとして、富城は口を閉ざした。今、自分が何を言つたって、何処か言い訳がましい。代わりに富城は大和への褒め言葉を口にした。

「……お前の美点はわ、其処だよな」

「うん？ ありがとうな」

「そんでもつてお前の短所も其処だよな」

「ええつ！？」

ショックを受けたような顔をした大和に、思わず富城は苦く笑つた。面白いような、つまらないような、嬉しいような、悲しいような。

そんな複雑な心が宮城の胸中についた。

「友達思い……、お前のは度が過ぎてるような気がするけどさあ。そういうの、程々にしどけよな。絶対いつか、面倒なことになるから」

面倒なこと。大和の脳裏に一瞬、“あのとき”的小百合が過った。宮城は笑いながら釣竿を床に置いた。早く蒟蒻を持つてこなければ、無ければ代用品として蒟蒻ゼリーを連ねて使おう。宮城は背を向けた。その瞬間、背後で大和の小さな声が。

「…………もつ、面倒なことになつてるかも…………」
「…………はあつ？ ちょ、お前、今なんて言つた！？」

聞き逃してしまいそうなほど、小さな小さな声。宮城の聞き間違いで無ければ、今、とても不吉な一言が聞こえた、
大和は誤魔化すように淡く笑うと宮城の横を通り過ぎた。

「お、おいつ！」
「部活の手伝いに、行つてくるな」

強引に突き放された宮城は、その言葉に頷くしか無かつたのである。

「」「」「」「」
「」「」「」「」

一、二、三、四、五、六、七、八、九、十

今日は待ちに待つた、いや別に待つてはいないうが文化祭だ。寧ろ今年はちょっとと来てほしくなかつた。今年は大和の部活、調理部と私の部活のパソコン部の合同だ。しかも大嫌いな分野の料理がメインの出し物だ。部活の方には行かないでクラスだけ手伝おうかと思つていたのだが……。

「なんで、よりによってカフHなのよ…」

まあカフェと言つてもただ単に買つておいたお菓子と飲み物とかを出すだけだ。美穂にとって一番問題なのは美穂が今着ている服だ。

「誰が作ったのよ、この服」

白い長袖に薄茶のベスト、下は薄茶のミニスカート、同じく薄茶と白のエプロンを腰に巻き付けている。どこかの喫茶店に本当に居そうな雰囲気を持っている服だ。結構凝っている服だ。おまけに校則で城のハイソックスを履かなければならないので尚更この服がピッタリと合ってしまっている。

「椿を除いた女子だよ。坂田さんは最近忙しくて参加してなかつた
もんねー」

「せめて、言ひてよ」

「だつて放課後はすぐに教室出でこつちやうじやん」

だそりだ。

いや、放課後じやなくとも話されるだろつと想ひて言ひてみたのだが、

「時間がなくてねー」

らしい。結構暇そつに友達と喋つていた氣がするのだが氣のせいだらうか。

とにかく私の知らないところでクラスの出し物はちゃんと進んでいたようだ。だが残念なことに実行委員は活動していなかつたようだ。結局この服もこの出し物も女子の企画らしい。ちなみに椿は男子を引き連れてどこかに出かけて行つた。おかげで女子のみで此処を取り仕切つている。

料理が出来ない私でも飲み物やお菓子を出すことは出来る。服さえ気にしなければ此処に居ても平氣だ。とにかく料理と服、どっちが面倒かと比べてみたら料理だつたので大和には悪いがクラスの方に暫く居させてもらつことにした。

力チカチ、あるいは黒焦げのクッキーを客に出すわけにはいかないと勝手に美穂の中で正論化した。昨日試しに予行練習をしたら消し炭の様な黒い物体がオープンから出てきたのだ。本に沿つてやってみたのだがまた何かを間違えてしまつたようだ。

「坂田さん、お茶を一つお願ひします」

「はーい」

とつあえず営業スマイルを顔に張り付け一ヶコリ。きっと他の人から見れば多少引き攣つて見えるだらうがこれくらいは仕方ないと思つてほしい。

美穂は銀色をした丸いお盆の上に烏龍茶の入った紙コップを一つのせると注文を受けた机に運ぶ。

「お待たせいたしましたー、烏龍茶一いつです」

「ん、ありがと」

用を済ませるとわざと戻つていぐ。美穂はまた定位置にスタンバイする。

「ねえ、一緒に学校見て回らない？」

「え、あ、お客様。そういうのはちよつと……」

「いーじゃんよ、ちよつとだけ、な?」

人気のスタッフ（生徒）は男子に口説かれたりしている。椿に首つたけの男子もいるが他にも、というプレイボーイもいるらしい。だが見えていて鬱陶しい。やるなら学校の外でやってもらいたい。このカフェでは多分もう声をかけられていない女子はない。美穂もさつき誘われたが笑顔で断つた。

「坂田さん、私、休憩行つてきまーす」

「ん、行つてらつしゃー」

時々すつと此処にいるのもあれなので、人不足にならない程度に交代をしてくる。所謂羽休めというのだ。本当は男子にもウェイターとして手伝つてもらいたいところだがどこにいるかが分からない。一応男子の服もあるようなので見つけ次第強制的に連れて来る、と言つのが羽休めしている女子の使命でもある。結果的に羽休めになつていな氣がするがこれも仕方ない。

「本多確保ー」

「放さんか！何故連れて来るー！」

服装を見る限り、こいつは部活の方に居たようだ。その心意気ならクラスの出し物も苦じやないだろう。

「坂田さん、バス」

「え、私なの」

「お願ひねー」

なんと面倒事を押し付けられてしまったようだ。仕方なく一緒に放り投げられたウェイターの服を片手に、本多を片手に近くの男子トイレに向かう。さすがに入ることは出来ないので本多に服を渡し着替えて来るよう指示。最初は抵抗していたが渋々中に入つて行った。私は入口で逃げないように見張る。

「……何故、俺がこのようなものを……。……これで満足か」

扉を開けて本多が出て来た。ユニホームも様になつてゐるがこの服も結構似合つてゐると思った。女子と同じ様に白の長袖、薄茶のベスト。黒いネクタイ、黒の前掛け、白い長ズボン。こいつ、スタイル良いんだなつて思つた。

「ほらウエイター君、手伝つてよ」

「何故手伝わねばならん！－俺は部活の出し物へ……」

「ダメよ。クラスやらないで部活なんて有り得ない」

今度は服を汚さないよう心氣をつけながら本多を引き摺つて教室に戻る。

「じゃ、私は部活の方手伝つてくれ」

「行つてらつしゃーー」

「待て！何故坂田は部活に行くのだ！」

「ひつち（クラス）で仕事をしたからよ、あんたも頑張りなさい」

走り寄つてくる本多の目の前でピシャリとドアを閉める。ブレーキが効かなかつたようでガスリと向こう側で鈍い音がした。しばらくはこのまま頑張つてもいいものだ。美穂はそのまま教室から離れ階段を下りはじめる。

「あ、着替えてない」

「うやらあんなに嫌がつていたのにいつの間にか慣れてしまつてい

たらしい。しかし着替えは教室に置いて来てしまつてゐる。

「これで行くしかないのかー……」

部長に会つたらからかわれそうだ、と若干の不安を感じ溜息をつきながら美穂は校門に向かつて歩いて行つた。

26 パソコン部女子（後書き）

最近勉強が面倒です。漢字なら得意なんだけどなー。

どうでもいいけど誰もお前の近況に興味なんて持つてないと想つ。
後書きに書くことがないなら無理に書かなくてても。

調理部とパソコン部の出し物がある校門に行くと、既に何人かの部員たちが集まっていた。

校門前ということもあり、大和たちの出し物は目立つていてるらしい。立ち止まり、クツキーの袋を手にしていく客の姿がちらほらと見えた。勝手に場所を決められてしまったものだから、多少の憤りを感じていたが、この場所は正解だったのかもしれない。大和は僅かに頬を緩めた。

大和はゆったりとした歩調を少し早めた。

すると、松島がパッと顔を上げ、大和を見た。ぱつちりと目が合つてしまい、何もしていらないのになんだか気まずい。松島はすぐに視線を外し、青山に何事かを言った。青山も大和を見る。

「あ、先輩っ！ 遅いじゃないッスか。俺らも始めてますよ
「ん、ごめん。結構人気みたいだな」

大和がそう言うと、青山と松島は顔を見合わせ、照れたようににひ、と笑つた。仲の良い奴らだと微笑ましく思つていて、二階堂の姿がないのに気付く。少し離れているのだろうか。辺りを見渡しても見当たらない。単に多すぎる客の姿に埋もれてしまつて見落としているだけなのかもしれないが。

大和の様子に気が付いた松島が口を開いた。

「一階堂先生ですかー？ それともパソコン部？」

探しているのは、と言外に含めて松島は大和を見上げた。大きく
くりくりな瞳は小動物を思わせる。

「先生」

「一階堂先生なら調理室にクッキー取りにいきましたよー」

「予想外の売れ行きにクッキーが足りなくなっちゃって、後でみんなで食べようつて残しておいたぶんも売るらしいッス」

食べたかったのに、と青山がシュンと俯いた。そんなにクッキーが食べたかったのか。今度、作ってきてやろう。大和が密かにそんな決意を固めていると、パソコン部の滝下がやってきた。自棄にきよきよとしているが、夏輝を探しているのだろうか。

「おーい、こっちだ。パソコン部の奴だよな？」

「……どうも」

酷く無愛想な奴である。美穂から聞いていた印象とは正反対。大和は驚いた。美穂の話では夏輝が大好きな騒がしい人間だということがだったが、夏輝以外には無愛想なのだろうか。

「部長はいらっしゃらないんですか。……はあ……」

「うん、いない」

滝下の問いに即答すると、滝下はがっくりと肩を落とした。最初からわかつていただろうが、それでもショックなようだ。あんな調理器具の何処が良いのか。大和には全く理解出来なかつた、そして、どうでも良かつた。一階堂はまだだらうか。

「あ、来たー」

不意に視線を校舎のほうに遣つた、松島の気の抜けた声。滝下は俯かせていた顔を勢いよく上げた。大和は人懐っこい笑顔で客にクツキーを手渡してから松島を見た。大和からクツキーを手渡された女子中学生（と思われる）は可愛らしく頬を染め、きやあと小さく黄色い悲鳴を漏らしながら友人のもとへと駆けていった。

「先生？」
「部長！？」
「副部長ー」

各々の期待していた人物ではなく、其処には喫茶店の店員のような服装の美穂が立つていた。美穂の姿を認めるに、大和はきょとんとし、滝下はあからさまに隠しもせずため息を吐いた。

「なんだ、美穂か」

「なんだ、副部長か……」

来て早々あんまりな態度に美穂の眉がぴくりと上がった。大和はそれに気付かず、美穂の見慣れぬ服装に不思議そうにしていた。

「……美穂、なんだ？ その恰好」

「つかのクラス、カフェで、着替えてくるの忘れちゃって……、」

申し訳なさそうにそう言いながら、美穂の瞳は何処か期待を孕んでいる。大和はにっこりと笑つて言つた。

「似合つてるなあ、可愛いぞ」

「……ありがと」

美穂は頬を染め、はにかんだ。その後ろでは青山と松島と滝下が三人でひそひそと何事かを話し合つている。後輩たちは意外と気が合つのかもしれない。

「さつすが部長。天然タラシー」

「さつすが部長。鬼女と名高い坂田先輩を手懐けてる

「副部長なんか気持ち悪い」

「聞こえてるんだけど」

我慢の限界が来ていた美穂。今度こそ、美穂の強烈な蹴りが炸裂した。しかし、青山と松島はそれを華麗な動きでサッと避け、滝下にだけクリーンヒットした。

大和はそれを気に留めず、顎に手をやり、考え込んでいた。松島が訝しげに大和を覗き込む。瞬間、大和は松島の顎をがつしりと掴んで自分のほうに真っ直ぐに向けた。

「うへあつー？」

松島の奇怪な悲鳴に周りにいた人たちの視線が集まつた。美穂たち三人は啞然としていたが、周りの客たちは何処か色めき立つていた。

自分と大和が“そういう”ものなのだと勘違いされていることを一瞬で悟った松島は胃を轟くされた気分だった。

部長のことは料理上手だし、とても尊敬している。でも、こういう誰にも先を予測出来ないような突飛な行動は慎んでほしい。松島は切実に思つた。

「あの衣装良いなあ」

独り言のように呟かれ、次いで目が合つ。松島はちょっと嫌な予感がした。まさか、と確信にも近い疑念を持つた。

「お前も着たら可愛いと思うぞ。ちょっと美穂のクラスから借りてきてくれ。お客様さん、たくさん来てくれるかも」

「……嫌ですよー。それに、あんな衣装に頼らなくたって私は十分可愛いから大丈夫です -」

「うん? そうか。なら良いや」

あつさりと納得し、離れる大和。周りの客たちは戸惑いながらも何処か拍子抜けしたように離れていった。

そうやって、冗談で言つてる“可愛い”をあつさり肯定したりするから、色々な誤解を招くんだ。思い切り掴まれ、少し痛む顎を擦りながら、松島は恨めしげに大和を上田使いに睨んだ。栗鼠のようだ、と大和は思った。

「うわー……、部長デリカシーない……」

「副部長に可愛いって言つておきながらすぐに他の女に、しかも副部長の田の前で言つたよ」

「うわあ、うわあ、と口に手を当て、滝下と二人で話す。滝下も青山と同意見のようで大和の阿呆さ加減にはさすがに呆れ顔だった。まあ、と小さく呟くように青山が言つ。滝下は青山を見た。

「実際、松ちゃんのほうが坂田先輩より可愛いあるんだけど」

「ああ……、言えてる」

「「あつはつはつ……」「フフウー?」」

「「つるつる?」」

怒りで顔を真っ赤にした美穂の制裁が阿呆一人に下された。痛

みに各々の患部を押さえる一人。周りで一部始終を目撃してしまった哀れな人々はドン引きだ。

「……お、なんか増えてら」

人混みを掻き分け、此方へ向かつてくる男。男は大和たちを見ると僅かに目を大きくして、ボソリと呟いた。

「あ、先生！」

「へーへー、先生ですよつと」

一階堂に気付き、駆け寄る大和。一階堂は大和にクツキーを手渡し、今いる人間の確認をはじめた。大和はクツキーの袋たちを台上に置いた。

煙草の臭いはしない。さすがのこの男も、人様に食わせるものを持つたまま煙草を吸うという暴挙には出なかつたようだ。

「調理部は全員揃つてるが……、パソコン部、少ねえな」

「すいません……」

「まあ、別に来ても来なくても俺一人いれは良いんだけどよ」

わざわざクツキーを売り捌くためにそう人数を割く必要もない、と一階堂は面倒臭そうに呟いた。単にたくさんの生徒たちの面倒を見るのが嫌だつたのだと思われる。

パソコン部である一人は気付いていないが、調理部の部員たちは気付いた。況してや大和は一階堂とは二年もの付き合いだ。一階堂の性格を把握していないわけがない。

相変わらずの面倒臭がり。どうして教師を志したのか。この男にはホストなどの水商売のほうがよっぽど向いているような気がする。大和はそんな考えを心の奥深くに押し込め、クッキーの袋を一つ手に取った。

平和。

28 パソコン部女子（前書き）

片岡です。1日1話更新と書いておきながら、1日間を開けてしま
いました。
本当に申し訳御座いません。
友人くたばれ（・言・）

なんだかんだ言つてクッキーはかなり売れ行きが良かつた。やはり私は作らなくて良かつたと美穂は内心安堵した。

しかし残念なことにあるあと出し物のブースに来ててくれたのは部長と杯田さんだけだった。部長が来たことで一人地面に伏したのは言うまでもない。というか部員多いのに来る奴少なすぎるだろ！絶対何処かでサボつているに違いない。美穂は後で何かしら手を打とうと考えた。

とにかく今日の文化祭で改めて分かつたことは当たり前だが調理部は料理が上手いという事とパソコン部員はサボるのが好きだという事と私は後輩に嫌われているということだった。

美穂の服に関しては五分五分だった。大和は褒めてくれて嬉しかったが部長には大笑いされた。軽く下しておいた。

最初にも言ったがクッキーは本当に大人気だった。結果、時間をまあまあ残す3時頃に見事完売した。今年の部活の出し物の中では優秀な成績を修めたのではないだろうか。ブースを片付けるのに時間がかかり解散となつたのはその30分程後のことだった。

美穂は特にすることも無かつたため寄り道もせずに真っ直ぐ教室に帰つてしまつた。

ガラリと扉を開けてまず目に入つたのは本多だつた。

「すいませーん、オレンジーつ下せーい」

「待たせたな！」

「わ、早っ」

なんとも綺麗な、それでいて全く無駄の無い動きでお客の要望に応えていく本多。もつと大変な事になつていると思つていたが意外とそうでも無いようだ。今はこのカフュの看板息子と言えるくらいの働きぶりではないだらうか。

「お疲れ、本多」

「むつ、坂田！遅いではないか！」

「ん、悪いわね。部活はもう終わつたから大丈夫よ」

「そりが、良かつたな！」

本多は自分の部活じゃないのに嬉しそうに頷いている。良いといふがあるじゃないか。しかし部活という言葉を出しても自分は戻らない所を見るとき處に居て手伝うのは満更でもないようだ。

「本多君、こひちに烏龍茶と紅茶お願いー」

「うむー任せとけー」

「坂田さん、こひちばバーラアイス二つねー」

「ん、了解」

本多は慣れた手つきで烏龍茶と紅茶を注いでさつさと運んで行った。美穂もアイスを運ぼうと誰かが持つて来た小型の冷蔵庫を開けて中

を覗いた。

「……無い」

無かつた。お客に出さなければならぬバーラアイスが一つも入つていなかつたのだ。近くのコンビニに買いに行くという手段があるので、近くと言つても10分くらいはかかるだろう。そんなに長い時間お客を待たせるわけにはいかない。美穂が悩んでいると不意に隣に人が現れた。

「どうした坂田！？」

「うひやあ？！」

本多はやはり油断できない。いきなり大声で話し掛けられたので美穂は思わず尻餅をついてしまつた。しかし本多はキヨトンと眺めている。…もしやこいつは天然なのか？

「……どうした？」

「え、…ああ。実はバーラアイスが品切れでね。買いに行くっていう手段もあるんだけどちょっと遠くて……」

それだけ言つと本多は「なんだ、そんなことか」と何でもないかのように鼻で笑つた。…いいつたつぱりちよつとムカつくな。

「何か手があるの？」

「あるー。」

「何よ

「俺が買いに行けば良かろ?」

本多はあつさりとまるで当たり前の事のように言い放った。確かに本多は野球部キャプテンだし足には自信があるだろう。だが短い時間で戻つてこれるだろうか。…しかし何を考えても他に良い方法は見つからなかつた。ここは彼に頼むしか無いのだろう。

「頼んで、いい?」

「任せとけ!」

さつきも聞いたような言葉を残して本多は早々に教室を飛び出して行つた。行動力があつて助かる。美穂はお客様に暫くお待ち下さい、と告げて彼を待つことにした。

5分後

「買つて、来たぞ……」

本多が息を切らせてなだれ込む様に教室に入つて來た。袋を見てみれば結構な量を買つてきたようだ。これならかなりの間持つだろう。

「これで、…大丈夫か

「うん、大丈夫。ありがとう本多」

「そりが、良かつた」

早くも息を整えた本多は何度か深呼吸をしてからお客様に注文を聞きに行つた。美穂はアイスを冷蔵庫に入れてから注文の数を持つてお客様の所に行つた。

「お待たせいたしましたー、バーラアイスー一つです」

二ツ「ひとつ営業スマイルではなく、美穂の素の笑顔でお客にそりが言つた。

「広崎！ 用がある！」

きりりと凜々しい表情の本多。いつも感じられる何処か向こう見ずな雰囲気は鳴りを潜め、その“用”には何か深刻な内容を思われる。

「俺には無いから」

しかし、お前の用など知つたことか、と大和は笑顔で教室のドアを閉めた。すぐに怒りで顔を真っ赤にした本多の手によつてドアが開かれる、と思いきや、珍しく“それ”はなく、沈黙を守つていた。大和が不審に思つていると、ドアが開く。

「よお！ 少年！」

「まな板娘はお呼びじやない」

大和は無表情でドアを閉めた。夏輝の笑顔が少し引き攣つっていたように見えたのはきっと氣のせいだろう。

先程から開閉を繰り返すドアの音に何事だ、と宮城が顔を出す。

なんでもない、と首を振り、宮城に配置に戻るよつばがる。

文化祭も後僅か。やつと此処に戻つてこれで、さあ、あと少し、頑張りうつとこつと来た、どうして奴らは現れるのか。

そんなとき、そつと開かれるドア。またか、とうふぞりしていると、見えた顔に大和は目を大きくした。

「あの……、広崎くん」

其処にいたのは、菖蒲だった。おずおずと遠慮がちに此方を覗き込む菖蒲に大和は優しく訊ねた。

「あれ、会長。どうした？ 何か用事か？ 中に入つていいぞ」

「その対応の差はなんだ！」

戸惑いを見せる菖蒲を快く迎え入れると、それと一緒に飛び込んでくる不要物。大和は拗ねたように唇を尖らせ、一人をねめつけた。

「自分の胸に手を当てる、よおく考えてみたらわかるんじゃないかな？」

飽くまで熱くならないよう、穏やかに、しかし辛辣な言葉を吐き捨てた。すると、夏輝はによによと氣味の悪い意地悪な笑みを浮かべ、揶揄するよつな声色で言った。

「わー、少年、セクハラー」

大和がその言葉に何事かを返そつとすると、本多が咎めるような目で夏輝を見た。「な……なんだよっ」と、夏輝も怯んでいる。おや、と思つてはいるが、本多が一言

「やめんか、夏輝！ 広崎とて人を選ぶ権利はある！」
「てめえええええ！ 選手生命に一瞬でピリオドを打つてやろうか！」

本多の胸倉を掴み、顔を近付ける夏輝。本多はそんな夏輝に対抗してアイアンクローラーを仕掛けながら、夏輝を睨みつけた。魚介類の求愛行動。またはなんらかの儀式なのだろうか。大和はそんなことを思つた。

「会長。まな板とハゲは放つておいて、用事はなんだ？」
「えつ……。あ、あの……、え？」
「誰がまな板だあ！！」
「誰がハゲか！ 全く……、」

菖蒲の背を押し、奥へ追いやろうとする大和の咳きを耳聴く拾い上げ、怒鳴り散らす一人。
しかし、すぐに落ち着いた。

いつもだったら、怒つていつまでもさやあさやあと喫くはずの一人は、じつと大和を見つめ返している。

その様子に、大和はやつと三人の用事が戯れのよつなことではないことに気付き、口を引き結んだのだった。

忙しくて疲れているだろうから、と優しいクラスメイトたちに見送られ、大和は今、生徒会室に来ていた。

生徒会室についた途端、夏輝と本多は我が物顔で椅子にどっかりと座った。夏輝に至っては茶と菓子まで要求している。

何処までもこの阿呆共は自分本意でしか動けないのだということを大和は再確認した。

「……それで、いったいなんの用なんだ？」

ついでに、と菖蒲が淹れてくれた茶を啜りながら、大和は訊ねた。夏輝は菓子を食り、上体を机に倒しながらちらりと大和を見た。そして、その目は気まずげに逸らされる。なんなんだ、と大和が眉を顰めると、本多が言い淀んだ。はつきりとしない口調の本多は見慣れぬせいか、酷く気持ちが悪い。

「お前は、嫌がらせをされているのか」

静かな言葉に、大和は一つため息を吐き、虚空を見つめた。答えは返さず。一人には目もくれず、夏輝は煎餅に手を伸ばす。本多はまた訊ねた。先程よりも語調を強め、ぱつり。

「嫌がらせを、受けているのだな」

訊ねる、というより、それは確認であつた。本多たちの中でそれはすでに揺るがぬ“答え”として其処にあるのだ。

用事はこれが、と大和は少しだけ面倒臭そうな顔をした。
本多は大和の表情の変化に気付かず、続けた。

「……菖蒲から、聞いた。お前が越戸に絡まれていた、と
「ただの、悪ふざけみたいなものだつたら、良かつたんだけど……」

本多の重々しい咳き。菖蒲は泣きそうに顔を歪め、下を向いた。
重苦しい空氣。夏輝はまた菓子を手に取つた。そして、口に入れる。
まるで、静寂が訪れるのを恐れるように、夏輝はぱりぱりと煎餅を噛み砕き続けた。

「もつ……、戻らないのかな……」

吐息混じりの声はゆっくりと空氣に融けた。

“戻らない”とは、いつたい何を指すのか。突如、変貌してしまつた生徒会の仲間たちか。それとも、不穏な空気が常に漂う学校か。

両者、 だらうか。

「……仮に、」

大和が切りだした。夏輝がぴたりと動きを止める。真っ直ぐに、大和を見た。食べかすがついたままの顔でそのように見られても、ただ滑稽なだけだ。なのに、笑えなかつたのは何故だろう。

「仮に俺が嫌がらせを受けているのだとして、
「、ちよっと……」

僅かに目を見開いた夏輝が怒りのよくな表情を見せた。伊達眼鏡の向こうにある瞳に、炎が揺らめいたような気がした。菖蒲が唇を噛んだ。

「仮にとはなんだ広崎！ お前……！」

「仮定つて意味だ。そんなこともわからなくなつたか

茶化すように吐かれた言葉に本多は何かを言おうと唇を戦慄かせ、閉ざした。大和はその様を見てフツと笑つた。幾つもの感情がまぜこぜになつたような、不思議な笑顔だった。

「それがお前たちに、なんの関係があるんだ？」

冷たく突き放すような言葉に、三人は目を見開いた。大和は相も変わらずにこにこと人懐っこい、いつもの笑顔で笑っているのに。感じる壁はなんだ。

「つ闇関係あるに決まつておろうが！！」

本多は咄嗟に叫んだ。このまま黙っていたら、隔てられた壁の向こうから大和が帰つてきてくれない。そんな不安に駆られて。夏輝は瞠目して、しかし自らも首肯した。菖蒲は射抜くように真っ直ぐな瞳で大和を窺つている。

すう、と一瞬だけ、大和の瞳が冷めた。一人、それに気付いてしまった菖蒲はふるりと肩を震わせた。垣間見えたそれが、常に大和の笑顔の裏に隠されていた本音、なのだろうか。

「へえ、なんでだ？」

社交辞令で興味のないことを訊ねているかのような氣の無い声。本多はそれを気に留めることなく、何故か勝ち誇ったような顔で言った。

「俺とお前が友人だからだ！」

どーん、と。夏輝はじいつと両者を見つめ続けていた。菖蒲は唾然としている。大和は茶を啜り、最後の一枚の煎餅を取った。

なんの反応も返さない三人に本多が照れ始めたところで、煎餅を咀嚼し終わった大和が口を開いた。

「そりだっけ？」

「なんだと貴様！」

「冗談だ」

けらけらと大和は笑つた。大和のあんまりな言い様に憤慨していだ本多も、その笑顔に毒氣を抜かれたように力を抜く。

「……ただな、お前たちは何か勘違いをしているようだから、一つだけ言っておきたいことがある」

穏やかに微笑んで、大和はそつと言つた。訝しげな三対の目が大和に向けられた。

「俺は、嫌がらせなんて受けてないよ」

は、と声にならなかつた空気が、誰かの唇の間から漏れた。大和は、此処でやつと温かみのある顔を見せた。自分の子供を宥めるような、そんな困つたような表情。

「あれはただふざけていただけだから」

“ふざけていただけ”。下駄箱に生ゴミを詰められ、齧られることが、“ふざけていただけ”。

馬鹿を言うな。掠れた声に、大和は目を見開いた。本多は大和を鋭く睨みつけていた。

「ふざけるな！ そんなに俺たちは信用出来んか！！」

「そうだぞー、少年。お姉さん寂しいー」

「ね、広崎くん。話してみて……？」

優しい声色に、大和は目を細めた。そつと、口を開く。

「会長……」

「貴様！」

此処に来て尚も二人の存在を認知しようとしている大和。大和は眉を下げる、笑った。

「でも、なんにもされてないよ

頑なにそう言い張る大和に、菖蒲と夏輝が言い募ろつとする。し

かし、それを本多が止めた。諦めたわけではない。一つの答えに行き着いたのだ。

「なにつ……！」

「広崎は、気付いておらんのではないか？」

本多の声が、嫌に響いた。大和は暢気な顔で「何がだ？」などと言っている。菖蒲と夏輝はそんな大和を見てから、顔を見合せた。有り得る。

三人は一斉にため息を吐いた。

なんとか隠そうとしているのであれば、説得のしようもあるが、本人がそれに気付いていないのならば、もうどうしようもない。それでも、と菖蒲が大和に言つ。

「何があつたら、すぐに言つてね。……心配、だから」「……ん？ わか、つた……？」

大和は首を傾げながら、戸惑いがちに頷いた。一先ずは良かつた、と安堵の笑みを溢す三人。そして、大和はただ笑つた。

ここまでされて気付かぬ者がいるものか。じくりと痛みを訴えた右足に、悟られぬよう顔を歪めた。

29 調理部男子（後書き）

“～ような”とか私使いすぎwww
長くなつてくると似たような言葉しか使えなくなつてくる私です。
知り合いに“上手な文章を書いているように見せるのが上手”と言
わしめた女だから仕方ない。

本多、夏輝、菖蒲の三人は何気幼馴染つていつ設定。今作りました。

文化祭が終わって二日目。結局ベストクラス賞（クラスの出し物で良かったクラスに贈る賞）を貰ったのは大和のクラスだつた。おめでとう。

昨日美穂は大和になにかお礼をしたいと思い、ついでにパソコン部員を懲らしめたいと思い、クッキーを作ることにした。結果、成功した。一つ味見をしてみたら、硬さも味も全く問題無かつた。美穂は感動した。

不器用ではあるがなんとか綺麗に見える様にラッピングもし、今日持つて来た。

ちなみにプレーンクッキーだ。

美穂は今日は楽しい日になりそつた、と思いながら下駄箱に向かい、自分の下駄箱の扉に手をかけた。

訂正。今日はとんでもない日になりました。

自分を見ている気配、それも殺気に近いものが悶々と漂ってきた。何か悪いことをしただろうか、と考えると何も無い気がした。だが、椿関連なら、かなりとは言わないが思い当たる事がある。

この前は説教もしたし、私が椿のことを良く思つてないことは向こうも分かつてゐるだろう。

ああ、何でいつも面倒な方向にしか進んでいかないのだろう。美穂は（別に信じてゐるわけではないが）神様を呪つた。

しばらくして殺氣は消えた、だがみんなに分かりやすい氣を出す奴は初めて見た。誰だつたかはよく分からぬが。

とりあえず下駄箱から靴を取り出して教室に向かう。教室にはいつも通りの女子と珍しく本多も来ていた。

美穂は軽く本多に挨拶をすると、準備をすぐに終わらせて大和のクラスに行つた。

「大和ー……、あれ」

この時間にはいつも居るはずの大和が居なかつた。寝坊でもしたのだろうか。

美穂が教室を見回すと、中に宮城が居るのが見えたので呼んだ。

「宮城。 大和、 知らない？」

「ん？ 大和？ …… あれ、 そりいえば居ないな」

宮城はキヨロキヨロと教室を見回した。宮城も知らないのか。 じゃあどこにいるのだろうか。

「遅刻、 か？」

「大和はそんなタイプじゃないんだけどな……」

うーん、 と二人で考え込んでいると、 後ろから不審者が現れた。

「広崎！ 用が、 」

「よつ、 と」

「ぐはあ？ ！ ！」

裏拳を不審者の腹にクリーンヒットさせる。倒れ込んだ不審者を見

てみれば、不審者はビリヤー本多だったようだ。

「あ、本多。ごめん」

「軽いな」

「…………」

結構良いことひいたし、未だに悶絶している本多。酷いな、まだ本気は出してないのに。

しばらく本多が復活するのを眺めながら待つた。野球部で鍛えてくるお陰か、さすがに復活が早かつた。一分程で本多は立ち上がった。

「で、あんたは何しに来たのよ

「どうせこつものー」

「勧誘だ!!」

本当に馬鹿でかい声だ。相変わらず何よりだが、喉は痛くならないのだろうか。

とりあえず私は今ので耳が痛くなつた。仕方ない、教室に戻ろう。

「宮城、大和来たらこれ、渡しといて」

「ん? いいけど……。自分で渡さないのか

「うん、大丈夫」

今は此処から離れたいから、とは言わずに早足でその場から離れた。

美穂は「このあと何の勉強をしようかと考えながら歩いた。

30 パソコン部女子（後書き）

セインさん、感想ありがとうございます！！！
こんなへタレですがこれからも頑張ります！

私からもう一度、有難う御座います。

どうして一般の女子高生が殺気なんてものがわかるのかは突っ込み
ないでやって下さい。この子は阿呆なんです。
もしかしたら美穂は暗殺一家の一族っていう裏設定があるのかもし
れないけど。

大和の好きな菓子は和菓子である。和菓子の、あの自然な甘味が好きなのだ、と大和と親しい人物ならば、きっと一度は聞いたことがあるだろう。

大和は、洋菓子はあまり好まない。食べれるし、美味しいと感じられるものも勿論あるのだが、どうしても不自然な甘つたるいそれが舌に付き纏う。

自然な、あの素朴な甘さが好きなのに、洋菓子はまるで計算し尽くされたような甘さ。

つまり、何が言いたいのかと言つと。

「少し小百合さんに構つていただけているからと、調子づくのもいい加減にしてほしいものだな」

大和は計算し尽くされた甘さは嫌いだし、其方の勝手な妄想を押し付けないでほしいということだ。

大和は自分よりも幾分か低い頭を見つめて頬を搔いた。どうしてこうも自分は絡まれるのか。何かそういう成分的なものが自分からは滲み出しているのだろうか。そうだとしたら少し、いや、かなり嫌だ。

大迷惑なことに、教室に向かう途中の大和をひつ捕まえて階段の踊り場の影に連れ込んだこの男の名前は、日野宮 京。一年生で、書道部の若殿と名高い人物だ。

そういえば、こいつは一年生なのに先輩である自分に対し、敬語を使つていない。そんな些細なことで怒るほど心は狭くないつもりだが、心象は良くない。大和は目を細めた。

少女と見紛うほどに可愛らしい容姿とは裏腹に、男氣溢れる口調。そのギャップが良いのだと女子たちは騒いでいた気がする。

男氣溢れるのは口調だけなのだろうか、と初めてその話を聞いたときは首を捻つたものだが、

(なるほど……、)

大和は深く納得した。人目のつかぬ暗がりへ連れ込み、ねちねちと相手を攻撃する。これでは丸つきり腐った女だ。いつそのこと女にでもなってしまえば良いのに。大和は日野宮の話を適当に聞き流しながらそう思った。

それにもしても、先程からかなりの生徒たちの声と雜音が反対側の階段に消えていく。時間は結構経っているのだろう。このままじゃ遅刻をしてしまうかもしれない。日野宮はさつきから同じことを繰り返しているばかりだ。結論を急いでほしい。

「それで……、つ貴方は人の話を聞いているのか！？」

明後日のほうに顔を向け、明らかに話を聞いていない様子に日野宮は苛立ちを見せ、大和を引っ張った。小柄な身体つきに似合わず、力強い。突然のことに対応できるはずもなく、大和の身体は傾いていく。

「あ……、」

大和は声を漏らした。
身体が傾いたということは、バランスを崩したということだ。
バランスを崩したということは、足元がかなり不安定だということ。

足元が不安定なら、転びそうになるのは当たり前だ、とすると大和は浮かせてしまった左足の対にあたる足で全体重を支えるしかないわけで。

小百合の信者共によつて傷付けられた、右足で。

「うう……！ ぐあ、！」

「……え？」

普通に歩いているだけでも痛みを感じる足。そんな心許ないもので支えきれるわけもなく、大和の身体は落ちていく。日野宮の呆気にとられたような顔と声。手摺を掴もつとして、空を切つた自分の手。すぐに見えなくなつた。

冷たい床に叩きつけられた身体。遅れて鈍い音が頭の中に響いた。じんじんと痺れるような痛みが背中から、身体中を侵食していく。

「くっ……、っは、うあ……」

咄嗟に頭を打ちつけないように左手を下敷きにしたせいで、尋常じゃない痛みが左手に走る。無意識に荒くなつていて呼吸を何度か深く息を吸つて落ち着かせると、大和は上半身を起こした。

痛みを少しでも和らげようと、手をぱりぱりと振つてみる。勿論、痛みは引かない。

踊り場から足音が遠退いていったのと、気配が全くしないことを考へると、日野宮はさつさと何處かへ行つてしまつたのだろう。日野宮のせいで自分は落ちてしまつたのに、薄情な奴だ、と少し不機嫌になる。

それにして、どうして自分は利き腕である左手を下敷きにしてしまつたのか。大和は真つ赤になつてしまつた左手の甲を見てから深いため息を吐いた。

そんなこと、わかりきつている。一番近かつた手摺が右側にあって、大和がそれに右手を伸ばしてしまつたからだ。そのせいで素早く動かせたのは脳からなんの指令も受けていなかつた左手だけ。

しかし、困つた。調理部は手が命だし、それにこんな手じゃノートも満足に取れない。痛みは全く治まらない。輝が入つているのかもしれない。考えれば考えるほど不都合な点が出てくる。

「どうしよう、かなあ……」

自分の情けなさすぎる声に、口許に苦い笑みが上ってくる。とりあえず、保健室に行こう。

結局、大和が戻つてこれたのはそれからかなり時間が過ぎた三時限目のことだつた。やはり、骨には蟬が入つていたようだ、保険医と共に直行した病院で、そう診断された。

保険医にはどうしてこんな怪我をしたのかと問い合わせられたが、曖昧な物言いでなんとか誤魔化した。どうせ言つなら、今じゃないほうが良い。

追い詰めて追い詰めて、その最後に奴等の罪を耳元で優しく囁いてやれば良い。自分の犯した罪を、噛み締めながら朽ち逝けば良い。ガラリとドアを開けると、一瞬で自分に集まる視線。一つ瞬きをしてから、大和は首を傾げた。

「……どうした？」

「大和ッ！ お前っ、骨に蟬つてどうこいつだよー！」

当たり前だが、大和の怪我のことは既に学校に報せてあつたらし。まさか、それが生徒側にまで伝わっているとは思わなかつたが。

そう一番に大和に声をかけたなおは富城だ。なんとも悲痛そうな

顔で大和を見つめている。心配をかけたが、と少し申し訳ない気持
ちになつた。

「ちょっと階段を踏み外してなあ……」

照れたような顔を作り、頭をがしがしと搔く。すると、宮城は素
直に騙されてくれたようすで、田を剥いて怒鳴りはじめた。

「はあー!? 馬鹿じやねーのー? 馬ツ鹿じやねーのー?」
「つむさい赤点ー!」
「ばいすな阿呆ー!」

これで、良い。ひつそりと大和は笑んだ。このまま有耶無耶にな
つて、消えてしまえば良いのだ。お前が気にかけるほどのことでも、
ないから。

大和はぶすぐれたような表情のまま、席についた。次の授業を確
認し、教科書を出そうと机の中を漁つていると、宮城が話しかけて
きた。

「これ、そういうや預かつてた。渡しとくわ
「なんだ?」
「美穂が作つたんだって。胃薬も一緒につけってくれりや氣に利くな
つて感心したのこ」

用件だけで済ませれば良いのに、余計な一言まで付け足すのが宮城らしい。大和は少し笑つて美穂の手作りクッキーを受け取った。中を開けて見てみると漂い、鼻孔を擦る仄かな甘い香り。プレンクッキーだ。見た目は普通である。見た目は。

今回はどうな“とんでもクッキー”になつているのか。大和は恐る恐るクッキーを口許に持つていった。その様子を見た宮城が吹き出し、一言。

「さつき俺食つてみたけど、大丈夫。珍しく普通だった」「勇気あるなあ、お前。でも人の貰い物を勝手に食つのはどうかと思つぞ」

まあ、良いけど。大和は咳き、クッキーを口に入れた。口に広がつた“普通のクッキーの味”。固まつた大和に何故か宮城が得意げに言つ。

「な、どうだ？　凄いだろ？　……大和？」

悪臭もしない。馬鹿みたいに形が崩れてるわけじゃない。味は不味くない。歯が砕けてしまうのでは、と思わず心配になるほど硬くもない。……普通、だ。

「……不变は有り得ない、か」

大和は目を伏せた。

不变は有り合えない。そう、何一つ変わらず其処に存在し続けるものなど、あるわけがないのだ。姿形は変わっていなくとも、中身は必ず変わっている。

美穂も、小百合も、学校も、そして、大和自身も。

何一つ変わらなければ、楽なのに。

大和はそんな言葉を呑み込み、クッキーをまた一つ口に入れた。
甘い。甘くて、苦い。

「…………」

クッキーはちょっとぴり焦げていた。

3.1 調理部男子（後書き）

私は洋菓子大好きです。

小百合と連動して大和も病んできた不思議。

今更ですが誤字脱字等御座いましたらお教えいただけないと嬉しいです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9530x/>

逆ハーツ子 が あらわれた！（仮）

2011年11月26日20時58分発行